未来の伝説

skylark

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の伝説

【Ｎコード】

Ｎ０２２３Ｗ

【作者名】

ｓｋｙｌａｒｋ

【あらすじ】

世界を守るために立ち上がった勇者と、勇者を倒し真の支配者になることを信条とする魔王。さらに目的の不明な魔法使いや第３勢力が現れ、世界の覇権を巡る戦いが始まろうとしていた。しかし、たび重なる世界の危機を前に頼みの勇者は記憶を失っていた。

これは記憶喪失の勇者と我が道を行く魔王の物語。

プロローグ

魔王が世界に対して宣戦布告した。その噂は大陸の端にあるのどかな片田舎にさえ届いた。その片田舎に住む農家の三男に生まれた俺が・・・まさか噂の魔王と戦う運命を背負ってるなんて。世の中わからないものである。でも、不思議と戸惑いは少ない。

俺を勇者と認めた聖剣『シュトラウス』を目の前に掲げてみた。手に入れてからまだ三日と経っていないのに俺の手によく馴染んでいる柄。刀身が青白く光っているこの聖剣を見ているとやる気がみなぎってくる気がする。

「・・・よし・・・！」

ゆっくりと腰の鞘にしまってから顔を上げる。

そして俺は、この世界を守るための一歩を踏み出した。

その1

ここはどこだ。

湿(しめ)った石の上から頭上へと目線を移動させる。

木々の隙間(すきま)から、青い青い、今まで見たこともないくらい青い空が見える。

「・・・・今まで・・・・？」

おかしい。『今まで』って、今から前って・・どんなだったっけ？

「思い、出せない・・？」

今はわかる。

俺はどっかの川辺(かわべ)にいる。・・どこの川辺かはわからないが。そして多分周りは森だ。木しか見えないからまず間違いないだろう。

「・・・・・・」

で、それ以外は？

「・・・・・・・・・・」

困った。どうしよう。俺っていったい誰で何してたんだ？

いまいち働かない頭を振ってとりあえず川の水に浸かっていた下半身を陸に引き上げる。

ふむ、大地が体にしっくりくるな。どうやら俺は陸上の生物らしい。・・・・・なんで陸上の生物が水に浸かってたのかよくわからないが。
半身浴してたとか。服着たまま。

「あり得ない」

呟いて立ち上がる。少しふらふらするが問題なさそうだ。でもちょっと頭がずきずきする。ふと『記憶喪失』という単語が頭に浮かびあがってきた。

記憶喪失。きっとそれが今の俺の状態だ。

それじゃあ考えたって俺が何者でなんでこんなとこにいるのかとかわかるわけないな。うん、俺は悪くなかった。それがわかればまだ良いだろう。・・何が良いのかと問われたら答えられないが。

「さて、これからどうしよう」

気分転換に声を出してみる。誰も返事をしてくれないのが無性に寂しかった。しかしそれも仕方がない。周りには誰もいないのだから。

「・・・とりあえず服を乾かさないとな」

独り言を言いつつ腰に手を当てる。

「ん？」

硬いものが腰にぶら下がっている。腰から外して顔の前に持ち上

げてみた。
剣だ。鞘ごと外したからどんな刀身なのかわからないがどうやら細身の両刃剣らしい。柄を握ってみると、手にしっくりとよく馴染む感触がする。

ひょっとして俺は剣で身を立てるため必死で修業したとか、騎士になりたくて家を飛び出してきたとか、そういう経歴の持ち主ではないだろうか。よくよく手のひらを見てみるとマメがつぶれて固くなっているし、どうやら熱心に剣の稽古に励んでいたようだ。我がことながら一生懸命な人間には好感が持てる。俺は頑張り屋な剣士志望（仮）だということにしておこう。

さて、ではそんな俺がこんなところに居るのはなんでだ？
・・・・考えてもわからないことは考えないに限る。どうしたってどうしようもないんだから。

足元はまだ多少覚束ないが、ここでこうしていても埒が明かない。とにかく一歩でもいいから歩きだすことが大切だ。そう考えて森の中に踏み込んでいく。

前後左右見渡しても木しか見えない。これは本格的に危ない気がする。やや遅い危機感を抱いた俺は少し焦りだした。焦りすぎて、足元を見ないで進んで木の根に引っかかったり、低い枝に頭をぶつけたり、とにかく散々（さんざん）な目に合った。
そのせいか、彼が声をかけてくるまで俺はその存在に全く気が付いていなかった。

「君、そっちに行くと森の奥に入ってしまうよ。人里に出たいなら逆方向だ」

穏やかな声音(こわね)でそう言ったのは、優しげな微笑(ほほえ)みを浮かべた青年だった。

その2

濃紺の髪。
蒼い瞳。
全身を隠す黒いローブ。
表情を見る限り悪い人ではなさそうだけど、何故だろう。あまり関わり合いになりたくない雰囲気を醸し出している気がする。
俺とは知り合いではないようだし、善意で声を掛けてくれたんだろうけど、正直声をかけないでほしかった。なんだかそう思わせる人だった。

・・・俺って実は人間不信だったのか？記憶をなくす前の自分がわからない。それって結構不安なことだったんだな。初めて知ったよ。
いや、初めてではないかもしれない。ひょっとして記憶を失うのは日常茶飯事とか。そんな日常は嫌だがそうだったら面白いだろうな・・・。「毎日が新鮮！」みたいな。

「て、そんなわけないし・・・」
現に今記憶喪失になっていて楽しいことは一つもない。

「どうかしたのかい？」
青年が覗き込んできた。心の内まで見通されそうでつい顔を逸らしてしまった。失礼かな、とは思ったがとっさの行動は制御不能だ。

「いや、何でもない・・です」
「ふうん・・・。そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。勇者を襲う

なんてリスクの高いことはしないから」
「・・・・？」
彼の言葉が引っかかった。今、変な単語を聞いたような・・・？
何か、聞き逃してはいけないことを言ったような気がするが・・。
しかし綺麗（きれい）な顔で笑う人だな。思わず見惚（みと）れてしまって何がおかしいのかわからなくなってしまったぞ。
「何か気になることでも？」
「えっと・・」
何が気になったんだ？ちょっと前の彼のセリフを思い出す。
『ふうん・・・。そんなに警戒しなくても大丈夫だよ』
これじゃない。もっと後だ。
『何か気になることでも？』
そう、気になることはあるんだ。これより前。
『勇者を襲うなんてリスクの高いことはしないから』
・・・・・。
『勇者を襲うなんてリスクの高いことはしないから』
・・・・・・。えっと・・・・？
『勇者を襲うなんてリスクの高いことはしないから』

・・・・・これだ！
勇者？俺が？そんなバカな・・。何かの間違いだ！
混乱が頭を支配する。ええいっ、考えてもわからないなら訊いてやれ！

「あの、つかぬことをお訊きしたいのですが」
「うん？何ですか、勇者様」

面白がっている口調が不愉快だ。でも、今はもっと大事なことを確認するべきだ！・・というか今また勇者って言わなかったか？

「それ、何？『勇者』ってどういうこと？！」
「どういうこととは？君は勇者だ。その腰の聖剣『シュトラウス』が何よりの証拠。それ以外に、何の説明が要るのかな？」

さっきとは打って変わって真剣な表情を見せる。その視線が差す腰の剣を見やる。高そうだとは思ったが、まさか聖剣とは・・・。
いや、これが聖剣とは限らないんじゃないか？聖剣に似せて作った贋作（がんさく）である可能性もある。聖剣なんて皆真似したがるだろうし、騎士志願者（仮）の俺が験（げん）を担いで聖剣モドキを手にしていても不思議じゃない。ああ、きっとそうだ！

「隠したって無駄さ。その聖剣『シュトラウス』は刀身が淡く光っているはずだ。自分が勇者じゃない、なんてあくまでしらを切りたいなら今ここでその剣を抜いて見せてよ」

光る剣？確かにそれは特別な感じがする。それに、おいそれと真似できない神聖さも漂うのだろう。ならば確かに抜けばわかるというものか。どの道、俺なんかが持っているような剣が聖剣だなんて

有り得ないだろう。
ベルトから剣を外す。右手で柄を握って、ひとつ大きく息を吸う。胸がドキドキする。
一瞬だけ息を止め、次に吐き出しながら一気に引き抜く。途端(とたん)緩い（ゆるい）光が目に入った。優しい光を纏(まと)った刀身に目を奪われる。
綺麗だ。素直にそう感じる剣だった。これが聖剣以外の何だっていうんだ。どこから見ても聖剣にしか見えない。

「ほら、それは聖剣だろう？ということは、君は勇者であると主張しているようなものだ」

そんな青年の言葉が、時間をおいてゆっくりと浸透する。
・・・・俺が勇者？本当に？もしそうなら、勇者を信じる人にとても顔向けできない。世界を救う存在が記憶喪失なんて情けない。むしろ俺が助けて欲しいこの状況。
どうして俺が勇者なんだよ。おかしいだろ、いろいろと。・・・しかし勇者は聖剣を持つ者の宿命。今からでも遅くない。勇者らしくするんだ・・！
意気込み一つ、青年に視線を戻す。

「で？勇者が何故こんなところに居るんだい？」
「残念ながらその質問には答えられないんだよ」

なるべく勇者っぽく威厳(いげん)に満ちた口調で話してみた。青年が美しく笑った。でもどこか愉(たの)しんでいるような様子だった。何かおかしな所でもあっただろうか？いきなり口調を変えたのがダメだったのか？

「魔王を倒すのが目的の勇者様に「何故」、なんて訊くほうが間違

っていたね」

俺は動揺を露とも知らず彼は勝手に納得してしまった。まだ愉しそうに笑っているし、元々こういう人なのだろう。

「勇者様はお仲間を連れたりはしないのかな？」

「仲間？いや、そういうわけじゃない、と思う」

「と思う？」

「あっ、いや、別に仲間を連れてもいいかなぁっていう意味だ！」

危ない危ない。勇者っぽく言わなくては・・・。

「へぇ、じゃあ今仲間はいないってこと？」

「えっと、今はいない・・・多分」

記憶がないからどうしても断言できないが。もしかしたら、今は別行動をしているだけで本当はいるのかも、と思うとやっぱり「多分」がついてしまう。これ以上突っ込まれるようだったらもう本当のことを言ってしまおう。

「じゃあ僕が立候補して良いですか？」

「えっ？！」

予想外の言葉に驚いた。こんな得体の知れない勇者（勇者なんだから正体はわかっているのだが）に誰がついて来るって？

思わず目の前の美しい顔をまじまじと見つめてしまった。

「認めてもらえたら嬉しいな」

「・・・・」

魔王に挑むのだ、仲間はいるに決まっている。だけどまだ勇者としての心構えもできていない、どころか、記憶すらない自分についてくることが果たして良いことなのか・・・。

俺は悩んだ末に結論を出した。

その3

ここはリーガルという街にある宿屋兼食堂だ。あの森から一番近かった街である。俺とシュナイゼル（森で出会った美青年のこと。名前を訊いたらそう答えた）は、食堂の隅で顔を突き合わせていた。

「ではまず、君の記憶を取り戻すことにしよう」

俺が記憶を失っていることを話した後のシュナイゼルの言葉だ。あっさり信じたし、仲間になることを翻したりしなかった。本当に変わっている。大丈夫なのか、と俺のほうが心配になってしまう。

「さしあたって、一番に思い出してほしいのは、名前、かな。なんて呼んだらいいのかわからなくて困るからね」

いや最初がそこかよ！とツッコミかかって止めた。なんだか無駄な気がする。それに俺自身、自分の名前を早く思い出したいと思ったから。

「でも思い出そうと思って、思い出せるわけじゃないし・・・。どうしたらいいのか、全然わからないんだけど」

思考が行き詰って、もはや勇者っぽく喋ることも止めてしまった。早く思い出して安心したい。それが俺の切実な願いだ。いや、それよりも先に風呂に入りたい。まだ泥だらけの汚らしい姿のままだし。

だがシュナイゼルは、そんな俺の願いなど知らない。よって適当な答えしか返ってこなかった。それは例えば、「頭を打ったら思い出すんじゃないかな？」とか「記憶を失った場所に行ってみるとか？」

などなど、である。
本気で言っているのだろうか？だとしたら彼は、記憶探しなど本当はどうでもいいと思っているに違いない。

「まあ、記憶を思い出すまでは「勇者様」って呼ぶよ」

にこにこと笑ってそんなことを言う。それはそれで恥ずかしい。間違ってはいないが真面目にそう呼ばれるには抵抗がある。
止めて欲しい。そう言おうと彼を見るも、とっても愉しそうな笑顔を浮かべているだけだ。なんとなく名前を思い出した後も彼は「勇者様」と呼び続けそうな気がしてきた。妄想ではない、恥ずかしい未来を回避するため、頑張らなければならない。
そんな決意を密かに固めた俺の姿を見て、シュナイゼルは口を開いた。

「ま、とりあえず君はお風呂にでも入ってきたら？勇者様がそんな汚い恰好をしているのはどうかと思うよ」
「あ、ああ・・。じゃあ今日はこれで解散しようか」

宿は同じだが取った部屋は別々。なんだか信用されていないような、逆に一応の警戒心はあってほっとしたような、微妙な気分になった。

翌朝。俺の名前がわかった。

その4

それは朝、着替えたときに気がついた。着替えた、と言っても寝るときに脱いでいたシャツとズボンを着るだけなのだが。記憶を失う前はわからないが、今の俺は剣以外の持ち物はない。

とにかく、シャツを着るとき何気なく見た襟の内側。そこに何か書いてあった。

「・・ん？」

目を凝らして見てみるが、汚れと一体になっていて読めない。

「昨日洗ったんだけどなぁ・・・」

それほどまでに汚かったのか、この服は。

数分、凝視して諦めた。しかし一体何が書いてあったのか。何故か異様に気になる。

「そうだ！上着に書いてあるならズボンにも何か書いてあるかも・・・！」

思い付きだが良い案な気がする。早速既に穿いていたズボンを脱いで裏返す。どうでもいいが、パンツ一丁で色褪せたズボンを必死で見る男なんて、この上なく怪しくないか？誰もいない室内でよかった。

場違いな考えを脇に置いて、ズボンを上から下まで見る。問題の文字、だと思われるそれはすぐに見つかった。ズボンの後ろ、尻部分の上、つまり腰が当たる部分に書いてあったのだ。

「お、あった。え～と・・ん～、ア？・・・ア、・・ア・・・・・駄目だ、後はよくわからない」

どうやら3文字で、アから始まる言葉だということしかわからなかった。

上着とズボン。その2つをベッドに並べて、文字を見比べてみる。一緒・・・のような気がする。少なくとも、どちらも3文字前後の短い単語だ。

何だろうか。もしかしたら、俺の記憶を呼び覚ますものかもしれない。

俄然(がぜん)やる気が出てきて、自分の服の上に身を乗り出す。そこで部屋の扉が音をたてた・・ような気がした。いや、扉が勝手に鳴るわけないのだから誰かがノックした音だろう。あまりに小さい音だったので勘違いかと思ったが、再び聞こえた。さらに、「勇者様？」という声も。

シュナイゼルだ。慌ててドアノブを掴(つか)むが、そこで今の自分を思い出す。パンツ一丁のままだった。さすがにこれで人前に出るわけにはいかない。3回目のノック。

「どうしたの、勇者様？まさか刺客(しかく)に殺されてたりするのかな」

「さらっと酷(ひど)いことを言うな！・・・あー、今まだちょっと出られる格好じゃなくって・・。すぐに行くから下で待っててくれないか？」

まさか、パンツしか穿いていません、とは大声で言えない。どんなことを忘れていても、羞恥心(しゅうちしん)はちゃんと備(そな)わっているようで安心した。そんなことを考えていると、扉の向こうで笑ったような音がした。

「なんとなく声掛けただけだから、まだゆっくりしていて良いよ」

という声がして、足音が去っていく。音が聞こえなくなってから、手早く服を着る。
シュナイゼルはゆっくりしていて良いと言っていたが、待たせるのは悪い。謎の文字は気になるが、考えてもわからないなら、今は後回しだ。そう決めて、『シュトラウス』を手に取る。一度刀身を確かめてから身に着けようとする。

「・・・あれ？これって」

不意に見た鞘に何か、引っかき傷のようなものがあるのを見つけた。まるで意図して付けたみたいに綺麗な傷跡（きずあと）だ。指でなぞってみる。

「・・・・なんか、文字、みたいだ・・！もしかして『シュトラウス』にも何か書いてあるのか？」

もう一度なぞってみる。確かに、何か文字が書かれている。３文字の言葉だ。俺はそれを読んでみた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ふーん、で、何が書いてあったんだい？」

昨日と同じテーブルで食事を摂りつつ、先ほどわかったことを報告する。俺としては、かなり重大な発見をしたと思っているのに、シュナイゼルは興味がなさそうな態度だった。別にそれが不満というわけではないが、ちょっと悔しくて発見するまでを事細かに話し

てしまった。おかげで、どうでもいいことまで暴露(ばくろ)してしまった気もするが・・まあいいだろう。

「とにかく！そこに彫られていたのは、人の名前だったんだ！それってひょっとしなくても、俺の名前ってことだと？！」

この重大さを共有したくて、つい大声を出してしまった。しかし、相変わらず彼は目の前の食事を、消化することを優先している。

「へえ～」

返事も生返事だ。

「・・・ちゃんと聞いてるのかよ？」

「聞いてますよ、勇者様。・・でも、温かいものは温かい内に食べたいじゃないですか」

「それはそうだけど・・。・・・で、書いてあった名前のことだが」

「うんうん、ついに勇者様の名前がわかるんだね。皆お待ちかねだよ、きっと」

ようやくこちらを見て、にこりと笑った。でも、『皆』って誰のことだ？このテーブルには俺達しかいないが・・・。

・・・・まあ、いいか。そんなことより、俺の名前だ。

「そう、『シュトラウス』には、『アリト』って書いてあったんだ！」

つまり、俺の名はアリトってことだ。そうやって自覚すると、なんだかしっくりくる。「これが俺の名前だ」って確信をもって言える。そのことが、どうしようもなく嬉しい。やっと俺の外観が見え

てきた気がする。

「ふんふん、アリト、ね。そういえばそんな名前だったっけ」

「・・・・は？」

今こいつ何て言った？

「・・どういうことだ？まさかお前、俺の名前を知ってて隠してたのか？」

「隠してはいないよ。噂で聞いたことあったかな、ってレベルだったんだ。といってもうろ覚えだったし、本当かどうかわからないから黙ってたけどね」

「だとしても、言ってくれればよかったのに・・。何か思い出したかもしれないだろ？そうすれば、こんな、「何て書いてあるんだ、これは」なんて考えなくてもよかっただろうし・・・」

ぶつぶつと文句を並べ立ててみるも、シュナイゼルはどこ吹く風でテーブルの上を片付けている。

「さ、そんなことより、もう出発しよう」

食器をテーブルの片隅にまとめて、席を立った。いつの間にかその手には荷物が握られている。

「出発って・・・どこにだよ？てか、「そんなこと」とか一言で話で片付けるなよっ」

先ほどのこともあり、拗ねたような口振りになってしまった。しかしシュナイゼルは、そのすべてを無視して意味深な笑みを浮かべるだけだった。そして何も言わないまま、外へ向かう。俺を待つつ

もりもないようで、振り向きもせずに歩いて行く。
仕方ない。いろいろ言いたいことはあるが、とりあえずついて行くことにする。
「で、どこに行くかぐらい教えてくれてもいいんじゃないか？」
追いついた先で訊く。シュナイゼルは隣を歩く俺を見て頷いた。
「そうだね。行き先ぐらい知りたいよね。・・・ところで勇者様？勇者様は魔王がどこにいるか知ってる？」
「は？魔王？・・・・知ってるわけないだろ」
何て言ったって俺は記憶喪失中だからな。とか、胸を張れることじゃないけど。
「うん、もちろん今の勇者様も知らないだろうけど、多分、記憶を失う前の勇者様も知らなかったんじゃないかな」
「ん？そんなことはないだろ？だって俺は魔王を倒すために旅してたはずなんだから」
「それがさ、魔王がいるって世間一般に言われているのは『第三大陸』なんだけど、僕、実はそこに行ったことがあるんだ。あそこには魔王の居城（きょじょう）なんてないよ」
・・・『第三大陸』？なんだそれは。というか、俺は今いるところもよくわかってないんだが・・・。
質問しようと口を開くが、先にシュナイゼルが話し出してしまった。
「魔王は今、『第一大陸』の近くにある、名もない孤島に住んでいるんだ。考えてごらんよ。君の、その聖剣が創られた聖国家（せいこっか）と、目

と鼻の先に魔王がいるんだよ？面白いよね」

何が面白いのかわからない。だが先に、地理の確認がしたい。根本がわかっていないからか、話の大部分が頭を素通りしてしまった。

今度こそ、とシュナイゼルの顔を見るが、またしても先を取られてしまった。

「まあ、魔王云々は今はどうでもいいよ。君には、先にやるべきことがあるからね。まず、」

「いやいや、ちょっと待てっ・・！今の俺には地理の記憶もないんだ。名前だけ言われても全然想像できない！」

さらに何か言おうとするのを無理矢理遮った。シュナイゼルは、何か言いたげな顔をしたが、諦めたように溜息をついた。

「仕方ないな。じゃあ、まずは簡単に地理について説明するよ」

その5

シュナイゼルの話を要約するに、俺たちが今いるのが『第二大陸』と言われるところで、国のない、街ごとに治められている、自治区と呼ばれる場所だ。そして、『第一大陸』はもっとも発展している大陸で、大国が密集(みっしゅう)しているらしい。『第三大陸』は、未開の地で行くだけでも大変な場所なのだとか。

「行くだけで大変な場所って、なんでお前はそんな危ない所に行ったんだ？」

「ん？さあ、なんでだったかな？それより、この3つの大陸は、北を上にして『第三』『第一』『第二』の順番で並んでいるんだ。そして、さっき言った魔王の住む孤島(ことう)は、『第一大陸』から見て北東に位置する海洋にあるんだ」

「へえ。・・この数字って意味あるの？」

「ああ、この『第一』とか『第二』っていうのは文明の発展具合を表しているんだよ。だから『第一大陸』は一番発展していて、『第三大陸』は文明自体がない、とされているんだ」

ふむふむ、と相槌(あいづち)を打つ。段々頭に地図が出来上がってきたぞ。といっても大陸の具体的な形がわからないから、大きなたらこが縦に3つ並んでいるような地図だが。まあ、今はなんとなくわかればいいよな！

「詳しいところは省(はぶ)くけど、後で地図とか手に入れたほうがいいんじゃないかな。目で見たほうがわかるからね」

「そうだな」

「で、本題だけど・・魔王の居場所がわかっても、記憶のない今の君が行っても危ないだけだよね」

「まあ、そうだな」

今の俺は自分の身すら守れるか不安なぐらいだからな。

「そこで、先に君の記憶を取り戻そうと思う。それは昨日も言った通りなんだけど、実は、君の記憶を取り戻す方法に心当たりがあるんだ」

「えっ？本当か！？」

「こんなことで嘘は吐かないよ」

記憶を取り戻せる。それは願ってもないことだ。期待に、顔が笑みの形を作り始める。でも、名前がわかってから良いことばかりが続いている。もしかしたら、そろそろ悪いことが起こるんじゃないだろうか。そんな不安から笑みが中途半端になって、怪しい顔になってしまった。

頑張って笑みを堪(こら)えている俺と違って、シュナイゼルは綺麗な笑顔を浮かべている。いや、綺麗というよりは、愉しくて仕方ない、お気に入りの玩具(おもちゃ)を前にした子供のような笑顔だ。これから何して遊ぼうかな、とか言い出しそうな、そんな顔を見て、笑みが引っ込んだ。

何か嫌な予感がする。

「あれ？どうかしたのかい？もっと喜んでくれていいんだよ？念願(ねんがん)叶うんだからさ」

「あ、ああ・・。それで、記憶を取り戻す方法ってのは？」

まさか・・・頭を強打するとか、変な薬を飲ませるとか、そういうのじゃないだろうな。もしそうだったら、全力でお断りしよう。魔王に挑(いど)む前に命がなくなる。

「うん、それはね・・・」
「それは・・・？」
「神官様に頼めばいいんだよ」
「？神官様？」
「そう。聖国家には神官っていう特別な役職があるんだ。その神官様は、祈りの力で様々な病気や怪我を治すことができるんだ。聞いた話では、記憶もある程度は戻すことができるらしいよ。どう？試してみる価値はあるんじゃないかな？」

確かにその話が本当だったら、試してみても良いかもしれない。それに、どうやら命に関わるような何かをされる心配もないようだ。なら、是非やってもらおう。

「よし、じゃあ、聖国家に行って神官様に頼んでみよう！・・・・ところで、聖国家ってどこにあるんだ？」
「さっきの話聞いてなかったのかい？聖国家は『第一大陸』にあるよ。でもここからじゃ船に乗って行かなきゃいけないし、距離も大分ある」
「そうか・・。てか、俺、金なかった。何か仕事しないと旅にも出れない・・・」

そう、俺の持ち物は今着ている服と、聖剣のみ、だ。金やその他の荷物は、多分どこかで落したんだろう。そういうわけで、俺は現在無一文だったりする。長期の旅になんて出る余裕はない。

「勇者が旅に出るために働くって・・・、それはそれで面白いけど、いらない心配かな」
「どういう意味だ？」
「いやだなぁ。勇者様は僕が何なのか忘れちゃったのかい？・・・僕は魔法使い、だよ？『転移』の魔法くらい使えるよ」

「いや、魔法使いだなんて今初めて聞いたから！！」
「そうだったっけ？でも見たらわかるでしょ」
「見てもわかんないからっ！」

でもよく考えてみたら、魔法使いっぽい格好しているし、勇者の仲間になろうと言っているのだから何か出来て当たり前だろうし、推察しようと思えばできた、かも・・？・・・・・・。いや、無理だろ。

とか頭の中で推理したり、ツッコんだりしてから、目の前の青年に目を戻す。・・うん、見てもわからない。

「君の様子を見ているの愉しいんだけど、話を進めてもいいかな？」
「えっ？あ、ああ、いいよ」
「じゃあ、『転移』の魔法を使うから・・そうだな、被害が出ない街の外がいいかな。ついてきて」

そう言ってさっさと歩き出してしまう。その後ろ姿を追いかけて俺も歩き出す。

『転移』の魔法ってそんな危険なのか？魔法のことは、当然思い出せていない。そのせいか、どんなものなのか全く想像できない。

魔法とはどんなものなのか空想している間に街を出て、誰もいない森の片隅（かたすみ）にたどり着いた。

「ここがいいかな。じゃあ、『転移』させるね」
「ちょっと待って。『転移』って危ないのか？」
「まあね。小さな物ならそこまで魔力はいらないけど、人間なんて大きなものを『転移』させようと思うと、大量の魔力がいるんだ。それが暴発したら・・・危ないでしょ？」
「そ、そうだな」

膨大な魔力が暴発して、辺り一帯が吹き飛ぶ様を想像してしまった。

「これって、俺は大丈夫なのか？」
「何？勇者様は僕の腕を信用してくれないの？」
「いや、そういうわけでは・・」

ただ、怖いだけ、とは言えなかった。無駄な虚栄心だが、言えないものは言えない。語尾を濁した俺を見て何を思ったのか、シュナイゼルは心から愉しそうな笑みをこぼした。

「心配しなくても、無事に送り届けるよ」
「あ、ああ。・・・送り届ける？一緒に行くんじゃないのか？」
「ああ、うん。さっきも言ったけど、人間を『転移』させるにはかなり魔力が要るんだ。それに、正確にコントロールしようと思うと、集中力も必要だ。だから、一人ずつ送ったほうが安全なんだよ」
「そうか・・」
「そう。不安だとは思うけど、大丈夫。ちゃんと送るから」
「・・・うん。信用してる。頼むよ」

腹を決めてシュナイゼルの前に立つ。それを確認したシュナイゼルは、荷物の中から杖を取り出した。
俺に向かって杖を掲げて、何かよくわからない呪文を呟く。

「・・・！」

変化は突然だった。訳のわからない呪文を聞いていたはずが、ふいに体が軽くなったのだ。そして一瞬の間の後、着地したような軽い衝撃を受けた。
気が付いたら、どこか、暗くて広い所に出ていた。恐る恐る辺り

を見渡す。暗くてわかりずらいが、どうやら室内のようだ。それもかなりの広さがあるらしく、隅が見えない。近くに太い柱があるのが見えるが、それ以外は暗闇(くらやみ)に呑(の)まれていてわからない。暗さからくる本能的な恐怖に体が竦(すく)む。

何だってこんなところに『転移』させたんだ。それに室内でなくてもよかったはず・・。次に来るはずのシュナイゼルに言うべき文句を頭の中に並べる。そうすることで、少し恐怖が紛(まぎ)れた。

そうだ。ここは聖国家のどこかなのだ。それにシュナイゼルが変な所に飛ばすはずがない。恐れることは何もない。

のほほんと、シュナイゼルを待つ俺は完全に油断していた。だから、この後、死ぬほど驚いたし、実際死ぬかと思う出来事に遭遇(そうぐう)することになった。

その1

「客を招(まね)いた覚えはないのだがな」

「・・・！」

突然暗闇から聞こえた声。そして、いきなり視界が明るくなった。所々に置かれた灯りが広大な空間を照らし出している。

明るくなった視界の中で、何かが動いた。それは、小さくて、羊のようなもこもこした体に、山羊(やぎ)のような短い角(つの)を持っていた。「それ」は床から30センチほど上に浮かんでいた。更に、黒い燕尾服(えんびふく)・・のようなものを着ている。

なんだこの可愛い生物(いきもの)は。

そんな感想を持って見ていると、「それ」が俺の近くまで飛んで（文字通り、宙(ちゅう)を浮いたまま）きた。

「頭(ず)が高い！」

甲高(かんだか)い子供の声が響いた。こんなところに子供がいたのかと、顔を巡らせてみるが見つからなかった。代わりに、やたらと偉そうな男を見つけた。・・・距離があるのに何故偉そうだなんてわかったんだ、俺。自分の発想に疑問を覚えて、もう一度男を見てみた。

そいつは短い階段の上、俺より高い位置に、遠目でも歴史があることがわかる椅子に座っていた。肘置(ひじ)きにもたれた右腕で顎(あご)を支えている。目線は完璧に俺を見下していた。

これだ。この上から目線が偉そうだと感じた要因だろう。立ち位置の問題なんて多分関係ない。こいつなら逆の立ち位置でも、見上げているのに見下ろす、という荒業(あらわざ)をやってのけそうな顔をしている。

目が合った。何か言ってくる。そう思って身構えたが、予想に反

して何も言ってこなかった。何故かと考えたが、すぐに思い至った。距離があるからだ。遮るものがない空間とは言え、ちょっと大声を出さなければ届かない距離だ。

「貴様、頭が高いと言っておろうが！頭を下げよ！」

また子供の声だ。そういえば子どもを探していたんだっけ。一度男の様子を見る。口を開く気はないらしい。ゆったりと座ったまま動こうとしない。あの男は後回しにしよう。とりあえず先に声の主を見つけることにして、視線を下げる。足元でぴょこぴょこと羊（？）が跳ねている。それ以外目につくものはない。

明るくなったとはいえ、広いこの部屋が隅々まで見通せるようになったわけではない。柱の陰に隠れていたら俺には見えないだろう。かなり近くで聞こえたし、そちらの方が可能性があるか。なんて考えているとまた聞こえた。

「これ！無視するでない！」

子供の声に似合わない老人のような喋り方だな。羊っぽいものが声に合わせて跳ねている。可愛らしくて、目的を忘れそうになる。思わずじっと見つめてしまう。

「返事をせんか！無礼者！！」

苛立たしげな声が響く。目の前には、まるで自分が喋っているかのように口を動かす羊らしき物体。

・・・・・・まさか。

外見はファンシーな「それ」は、怒ったように腕を振り上げて、再び「無礼者！」と怒鳴った。

「え・・えええー！？」
「うるさいぞ！・・・とにかく頭を下げろ！跪け！」

ぽーん、と「それ」は飛び上がって、俺の頭を小さい拳でぶん殴った。

「いでっ！！」

予想外に痛い。たまらず頭を押さえてしゃがむ。

「跪け！あの方の前での無礼は、吾輩が許さんぞ！！」

羊がぽこぽこ、と頭を叩いてくる。小さな見た目に反して、一撃一撃が重い。容赦のない攻撃に、意図せず跪いたような格好になってしまった。すると、ようやく攻撃が止んだ。

「うむ、それで良いのじゃ。魔王陛下の前では、常にその姿勢でいるようにするのじゃぞ」
「・・・・・・・え・・？」

今・・、聞いてはいけない単語を聞いた、ような気がする。
いやいや、聞いてない。俺は何も聞いてないぞ！俺の旅の目的が目の前に居るなんて、そんなことあるわけないからなっ！

「これぃ！返事をせぬか、無礼者めが！」

可愛い羊が横で起こっているが、俺は壇上の男から目を離せない。
・・・・わかった。きっとあの人は聖国家の王様とかだ。羊も「陛下」って言ってたし、その前の単語は何か別な単語と聞き間違えただけだろう。そう考えれば納得だ。だって俺は聖国家に『転移』

してきたんだから。うんうん、当たり前だ。
一人納得した俺。
「遠いな・・」
誰かの呟く声と、指を鳴らす音。
「うえあっ！！？」
体が前に引っ張られた。とっさに踏ん張ろうと力を込めるが、両足とも宙を浮いてしまって意味を為さない。あっという間に男の姿が大きくなる。違う。近づいたのだ。と、引っ張っていた何かが消えた。しかし、飛んできた勢いまでは消えてくれなかった。今度は床が急速に近づいてくる。反射的に体を丸めて衝撃(しょうげき)に備(そな)える。
「・・っ！！」
頭を守る手に固い衝撃が。次いで体が転がる感触。最後にどこかの角に背中がぶつかって止まった。
「・・・〜〜っっ・・」
打った背中が痛みでじんじんする。緩慢(かんまん)な動作で、丸まっていた体を伸ばそうとする。だが、体が思うように動かない。というか動きたくない。身動きすらできずにいる俺の頭上から、怒鳴り声が降ってきた。
「貴様、魔王様の御前(ごぜん)で何と無様(ぶざま)な姿をしとるか！しゃんとせい！」
また羊の言う言葉が間違って聞こえた。耳は駄目らしいが、他は

大丈夫だろうか。
体中の感覚を意識する。そうすることで現状を理解しようと試みる。
どうやら俺は、先ほど見た短い階段に逆さまに伸びているようだ。
ようやく自分の状態を確認できた俺は、頑張って目を開けてみる。涙で滲(にじ)む視界に、俺が飛んできたのとは雲泥(うんでい)の差で、ゆっくりと安全に到着した羊の怒り顔が入ってきた。今はその姿に可愛いなんて思っていられる余裕がない。というかこの羊、俺が声も出せないほど痛がっているのが見えていないのか？

「そもそも貴様、一体どこから入ったのじゃ。不法侵入じゃぞ」

小指の先ほども心配していないようだ。舌打ちしたいのを我慢して起き上がる。治まったのか麻痺したのか、ある程度痛みが引いた体を立て直す。床に胡坐(あぐら)をかいて座る。やっぱり背中は痛いが、頭は正常に働きだしている。試しに今羊が言っていたことを吟味してみよう。
えっと、不法侵入がどうとかって話だったな。・・・いや、そもそも、浮いて喋る羊っぽいもの、という存在自体が常識外なやつに、常識を諭(さと)されたくない。それとも俺が忘れているだけで、この生物は普通に存在するものなのか？

「・・・『転移』して来た、か。何の用で俺の城に来た？」

俺が自分の中の常識を疑いだしたとき、背後から声がした。振り仰ぐと、壇上に立った男と視線がぶつかる。
冷たい目だった。他人に命じることに慣れた態度で、羊が言っていた「陛下」という呼び方がしっくりくる。ということは、この男は本当に王様だということだ。そう思うと、にわかに緊張してきた。

「陛下が直々に声をかけて下さっているのだぞ！返事をせぬか！」
「あ、えっと・・・こ、ここはどこ、ですか・・？」

羊にせっつかれて、関係ないことを口にしてしまった。案の定、男は眉を顰(ひそ)める。

冷静になれ、俺。意識して呼吸を緩(ゆる)やかにする。そこで初めて、男の顔全体を見る余裕が出てきた。

まず印象的なのは、その冷たい目だ。冷たいどころか凍っているようだ。そのくせ瞳の色は、炎の赤。切れ長の瞳の上には整った眉。すっきりした鼻筋に、大き過ぎず小さ過ぎない口。それらが乗る肌は、白い。病的な白さではない、白さ。その白い肌とは対照的な真っ黒な髪。

ぱっと見ただけで、女の子にとてもモテそうな外見だった。

いろいろと負けた気分を味わいつつも、せめて姿勢だけは上品でいようと、できる限り綺麗に跪く。上手くいったかどうかわからないが、視界の隅で騒いでいた羊が大人しくなったので、とりあえず良しとした。

意識を男に戻す。男は無表情で俺を見下ろしていた。俺が男を観察したのと同様、俺の全身を眺めているようだ。

「あ、あの・・」

沈黙に堪えかねて口を開く。男が俺と目を合わせてきた。

「何だ」
「え？いや、えっと・・、それで、ここはどこなのかっていうのは・・？」

失礼を承知でもう一度同じ問いを発する。考えないふりをしていても、どうしても考えざる負えなくなってきたのだ。しかし、男は

何も言わなかった。ただ視線を下へずらしただけだった。
何だ？答えられないことでもあるのか？それとも気を悪くした・・？
だがすぐにそれらが見当違いであることがわかった。男の視線は俺の腰にある、聖剣『シュトラウス』を捉えていたのだ。
王様の前で武装しているのは如何にも拙い気がする。慌てて弁解しようとするが、男がにやりと笑ったのを見て言葉を飲み込んだ。まるで待ち望んでいたものが来たかのような、そんな歓喜に満ちた、それでいてどこか物騒な笑みだった。

「意外と速かったな」
「はい？」
「だが、まあいい。さあ、始めるか」

何のことを言っているのかわからない。何かをやる気満々な男が、俺に向かって右手を掲げる。俺はただ呆然とそれを見ているだけだった。

その2

体中がとても痛いです。
思わず敬語が出てしまうぐらい痛めつけられた。
「弱過ぎて話にならんな」

壇上から男の声がする。何で、こんなことになったのか。俺の身に起こったことは単純明快だ。いきなり魔法で攻撃されたのだ。しかも連続で。反撃どころか、『シュトラウス』を抜く暇もなかった。そして、あっという間に意識は彼方に飛んで行ってしまった。気を失っていたのは、そんなに長くはなかったようだが、おかげでダメージは少しも回復していない。
動かない体で、男の苛立った声を聞く。

「加減してもなお、避けることすら出来ないとは・・・。貴様、鍛錬は充分に行ったのか？それに、仲間を一人も連れてこないとは・・・。「その胆力は良し」というものだがな、勝つためには手段を選んでいる場合ではなかろう。おかげでこちらは随分と退屈だったぞ」

なんだろう・・・。何で俺は、ぼこぼこにされた挙げ句に説教されているんだろう？
頭が痛い。攻撃を受けたから、だけではないだろう。どうしたらこんな、わけのわからない状況になるんだ。そろそろ限界だ。体的にも、頭的にも。
「うん？また気絶したのか？軟弱この上ないな。・・・仕方ない」
盛大な溜息が聞こえた。

ふわっ、と体が軽くなる感覚がした。次いで労わるかのような優しいぬくもりが体を包み込む。心地良い風が頬を撫(な)でる。体が動かないのをいいことに、ゆったりとその感覚に浸(ひた)る。しばらくそうしていると、やんわりと包み込んでいた空気が薄まってきた。やがて完全に消え、俺は目を開けた。気がつくと、体の痛みが全く感じられなくなっていた。

「痛く、ない・・？」

寝転がっていた体を起こす。あちこち触って確かめてみるが、どこにも痛みはない。不思議に思っていると、羊が目の前に飛んできた。

「貴様の傷を治したのは、魔王陛下である。感謝の言葉を述(の)べるのじゃ！」

「・・・・・・」

ああ、俺は本当に何と聞き間違えているんだろう。しかし、訊き返すのは躊躇(ためら)われる。というか、普通に恥ずかしい。状況が許さなかったとはいえ、最初に聞き直すべきだったな。反省反省。

「何故黙ったままなのじゃ。魔王陛下に失礼であるぞ！」

まだ良く聞こえないな。

・・・・・・とか、現実逃避している場合じゃないか。ああ、本当に、何でこんな早くに、最終目標と出会ってしまったんだろうか・・・？

ふと、シュナイゼルの愉しげな顔が頭をよぎる。考えまいとしていたが、ほぼ間違いなく、絶対、あいつのせいだ。でなければ、運命のいたずらだ。

今となってはどうでもいいことを考えながら、立ち上がる。改めて、魔王と向き合う。
魔王は、最初に見たときと同じように、椅子に座ってこちらを見下ろしていた。先ほどと違うのは、その足元に、聖剣『シュトラウス』が無造作に置かれているところだろう。
さて、どうするか・・。と考えるが、唯一の武器を取り上げられては、どうしようもない。とは言っても、完膚なきまでに叩きのめされた後で、もう一度戦う、なんて選択肢は浮かびもしないが。かといって、このまま殺される、という展開にはしたくない。なんとかしなくては・・！
せめてもの抵抗、ではないが、眼前の魔王を睨みつける。冷たい双眸が、俺を見据える。

「・・・何だ、その眼は。負けを認めないつもりか？それとも、言い訳でもするのか？」

小馬鹿にしたように鼻を鳴らす様は、「魔王」のイメージ通りだった。
ここで怯んではいけない。腹に力を込めて息を吸い込む。

「違う」
「ほう・・？では、何だ？」
「・・・話を、聞いてほしい」
「話？」

そこで魔王は、考えるように口を閉ざした。冷めた視線は、俺の考えを読み取ろうとしているのか、少しも逸らされない。と、魔王が微かに笑った。「面白い」。そんな声が聞こえてきそうな笑みだ。

「その話とやら、聞いてやろう」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

またしてもというか、何というか。記憶を失ってからの俺が出会うのは、何でこう人の不幸を愉しんじゃう手合いばかりなんだ。

あの時俺が話したのは、特に意外性もない、俺の現状だった。つまり、俺の記憶がないって話だ。その結果、俺は魔王の城に滞在することになった。

「何でなんだ・・・」

あれは、時間稼ぎを考えての発言だったのだ。そう、俺としては、あの場をどうにかできればよかったのだ。そういう点から考えれば、成功したのだろうが・・・。

それにしれも、戦いを楽しみたい魔王に対して、「記憶を取り戻してから戦ったほうが楽しめるよ！」と言ったつもりが、何故こうなった。魔王は受け取り方すら予想外なものなのか？

どう聞き取ったのか、俺の話を聞いた魔王は、こう言ったのだ。

『面倒くさいな。今から、強くなるために鍛えたほうがよっぽど有意義だ』

思い出す度に、「どうしてなんだ」と思わずにはいられない。しかもその後、

『それに、ちょうど暇を持て余していたところだ。並みの戦士では、手も足も出ないほど強くしてやろう』

とか言った。嬉々としてそう言った魔王は、何て言うか、悪意の

塊のように見えた。俺に嫌がらせをしているようにしか見えない。
それからは、必死で抗議する俺を無視して話は進み、今に至る。いつの間にか城に滞在することになったし、魔王直々(じきじき)に戦闘訓練を受けることになっていた。

「どこで間違えたんだろうか・・？」

可愛い羊に案内された俺の自室、ということになった一室で、俺は何度目かの溜息を吐いた。
何度思い出しても、現状を打破(だは)する方法がわからない。溜息ばかりが出てくるだけだ。そして、最後には必ず、あの魔王の嬉しそうな顔を思い出す。あれはどう考えても、俺をどのようにして痛めつけるか考えている顔だ。明日からの訓練とやらで、生き残れる自信がない。

「・・・・はあ・・。寝るか」

うん、明日のことは明日考えよう。とりあえず今日は、これ以上何もないと良いな。そんな願いを胸に、やたらと豪奢(ごうしゃ)なベッドに身を横たえる。目を閉じると、すぐに眠りが訪れた。

その3

「ん・・」

瞼(まぶた)に光を感じて、意識が浮上する。だが、ここはどこだ？

一瞬、記憶を失った初日を思い出した。また、記憶が無くなったのかと、頭が変な妄想(もうそう)をしだす。いや、そんなはずはない。記憶を失ったことを覚えているじゃないか。まだ眠気が残っているようだ。・・・・えっと、昨日は確か・・。

「ああ、魔王の・・・。はあ・・」

一気に目が覚めた。思い出すまでもなかった。俺は魔王の城に居るのだ。朝から溜息を吐いてしまうほど憂鬱(ゆううつ)なことだが、事実だ。

いつまでも悲観(ひかん)に暮れているわけにはいかない。俺はベッドから降りた。

さて、着替えは、と。

「あれ？」

昨日脱ぎ捨てたはずの服がどこにも見当たらない。

「そういえば・・」

この部屋まで案内してきた羊、名前は確か・・バラシオン。とことん見た目とちぐはぐな羊だ。その羊、もといバラシオンが、洗濯をしてくれるとか何とか言ってたような・・。

『魔王様の御前(ごぜん)に、このような汚(きたな)らしい恰好で現れるとは・・！万(ばん)

死に値(あたい)するぞ！恥を知れ！！・・・とにかく、この服は明日洗濯してやろう。例え豚のような恰好がお似合いな貴様であっても、魔王様の御前で二度とこのような姿を晒(さらし)させるわけにはいかん』

・・・思い出さなければよかった。と、とにかく、バラシオンが洗濯してくれているってことだな！でも、じゃあ、今日俺は、何を着ればいいんだ？

替えの服は見当たらない。途方に暮れていると、寝室から更に奥に続く扉があることに気付いた。

「何だろうな、ここ」

昨日は疲れていたこともあって、部屋の説明は右から左に聞き流してしまっていた。まあ、開けてみればわかるのだが。特に何も考えないで開けた。

「うわぁ・・」

服服服、服が至るところに下がっていた。どうやら衣裳(いしょう)部屋らしい。それにしても、無駄にスペースを持たせた部屋だ。寝室とほぼ同じ大きさじゃないか？ただでさえ広い部屋が、服だらけで余計に奥行(おくゆ)きがあるように見えてしまう。だが、これは着てもいいもの、だよな。さすがに下着一枚で出歩かせるわけはないから、大丈夫だろう。そう判断して、手近な服を物色してみる。やたらとキラキラした、悪趣味、いや、俺の感性とは合わないデザインの服ばかりだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから数十分かけて服を探して、どうにか無難(ぶなん)なものを見つけ

た。鏡の前でチェックしてみる。下手なものを着ると、あの羊もどきに何を言われるかわからないからな。
上は白のワイシャツと深緑のベスト、下は黒のスラックス、に着替えた俺が映る。入念にチェックして、顔を上げる。すぐに、ぴかぴかの服が目に入る。こんな一般的な服があるなんて、入口からは想像できなかった。諦めず、何十分も探した甲斐があったというものだ。自分の頑張りを褒めてやりたい。

うんうんと頷きながら、無駄にバリエーションの多い衣裳部屋を後にしする。寝室に戻り、ベッドに立て掛けていた剣を身につける。そして、寝室から客間を通じて廊下へ出る。
昨日バラシオンが、朝起きたら食堂に来るように言っていたな。確か、部屋を出てから右手に歩いて、階段を通り過ぎた最初の部屋、だったはず。疲れ切った人間に対する気遣いを、欠片も感じられない口調で一気に言われたから、少し自信がない。だが、とにかく行かなければ。また怒鳴られでもしたら、面倒だ。そんなことを考えつつ、どこを見ても豪華な廊下を歩きだす。

「うわ、これ、細かいなぁ。・・・しかもこんなところに置いとくにしては、やたらと高そうな壺が飾ってあるし」

しばらくは、素晴らしい意匠が彫られた壁や天井、所々に置かれた高価そうな置物を見ながら歩いていた。が、結構歩いているのに、一向に階段が見えない。ちょっと焦って、早足になる。
まだ見えない。少し戻ったほうがいいかも？と思い、振り返る。似たような廊下が続いている。そこで気がついた。そもそもここは何処なのか、全くわからなくなっていることに。自分が出てきた部屋の扉は、一体どれだったか。

「えっと・・・」

行こうとしていた先を見る。階段は、なさそうだ。そして、誰もいない。城というくらいなのだから、使用人もたくさんいるはずなのに、気配すらない。もう一度、振り返る。やっぱり誰もいない。
嫌な汗が背中を伝う。訳のわからない衝動(しょうどう)に駆られて、とにかく歩きだそうと足を上げる。しかし、そこで問題が発生した。

どっちへ行けばいいんだ？
行くか戻るか、の2択しかないが、重要だ。行くとすれば、階段を見つけるまで歩き続けなければならない。では、戻るか？いや、駄目だ。俺が休んでいた部屋が、どこだったか、もうわからないじゃないか。・・・と、いうことは。

「行くしかない、か」

心が挫(くじ)けないよう呟いて、再び歩き出す。しかし、どんなに歩いても、変化は見られない。焦りを通り越して、得体の知れない恐怖が湧(わ)きあがってくる。歩調が速くなり、とうとう走り出してしまった。それでも階段どころか、廊下の端にすら着かない。ばたばたと、足音を立てて走り続ける。段々、何で走っているのかわからなくなってきた。こんなことなら部屋から出なければよかった。そんな後悔が胸を占める。

「ばたばたとうるさいぞ！！廊下を走るでない！！」
「！！うわっ！？」

後ろからいきなり怒鳴り声を浴びせられ、つんのめる。危うく転びそうになった体勢を整えて、振り向く。
何の変化もなかった廊下に、バラシオンが出現していた。

「あ・・、よかった・・」
安堵のあまり座りこみそうになる。そんな俺に、バラシオンは不審そうな眼を向けている。
「何が「よかった・・」じゃ！朝起きたら食堂へ来るように言うたであろうが！全く・・、人間はそんな常識すらも解さんのか？」
ぷりぷりと怒るバラシオンを見て、ようやく立ち直れた。途端に、バラシオンへの怒りが沸き起こった。こいつの言うとおりに歩いても、階段なんて見当たらなかったのだ。当然と言えば当然のことだった。
「お前、俺に嘘を教えただろ。右に行っても、食堂どころか階段すら見つからなかったぞ」
「何を言っておる。階段なら、ほれ、そこにあるではないか」
とバラシオンが短い腕で指した先、俺が進んでいた方に目を向ける。
階段があった。そんなわけがない。俺がバラシオンに呼び止められるまでは、階段なんて影も形もなかったのだ。そのことは、神にだって誓える。
「そんな、馬鹿な・・！」
「訳のわからぬ奴じゃ。・・・そんなことより、早く食堂に入れ。恐れ多いことに、魔王陛下が朝食を共に摂ってくださるそうじゃ。こんな良い機会はまたとないじゃろう。失礼のないようにするのじゃぞ」
それだけ言って、俺を追い抜かす。口を開いたままの俺を無視し

て、バラシオンは階段を横切った先の部屋の扉をノックし、中へ入ってしまった。
少しして、俺も歩きだす。階段の手すりに触れてみる。その質感が、幻でもなく確かにそこにあることを示していた。ここで立ち止まっていても仕方ない。納得できない気持ちを抱えたまま階段の前を通り過ぎ、部屋の扉に手をかける。と、さっきのバラシオンを思い出す。
ノックは・・必要だろうな、多分。しておくに越したことはないだろう。後でぐちぐち言われたくはない。
ノックする。扉が厚いからか、籠(こも)った音がした。すぐに、扉が内側に開かれる。開いたのは、バラシオンだった。無言で中へ入る。

「遅かったな」

声をかけてきたのは、既にテーブルについていた魔王だった。部屋の奥から俺を見ている。相変わらず冷たい目だ。しかし、今朝はどこか愉しそうな表情をしている。一体なんだというのか。
魔王の相手をする気も起きず、やはり無言でバラシオンの引く椅子に腰かける。俺が来るのを待っていたのか、すぐに料理が運ばれてくる。
どれもおいしそうだ。朝から運動したこともあって、腹はかなり空いている。怒っていたことも忘れて、並べられる料理を見ていたら、魔王が低く嗤(わら)った。それがひどく気に障(さわ)る。

「何だよ、さっきから」
「さっき？何のことだ？」
「・・俺が入って来た時も、やたらと愉しそうだっただろ」
「ああ、そのことか。それは仕方のないことだ。思った以上に、簡単に引っかかってくれたからな。あれで笑うな、という方が無理な話だ」

思い出したのか、また小さく笑いを零した。そんな魔王を見て、一体何を言われているのか、すぐにはわからなかった。だが、一瞬後、閃いた。厭な想像が頭の中に構築される。

「お前、まさか・・」
「ふっ・・、とりあえず貴様の最初の課題は、魔法に対する耐性をつけることだな」

それは、ある意味明確な答えだった。しかし、ここで怒りを爆発させてはいけない。冷静に、まずは事実確認だ。

「ちょっと待て。一つ確認させてくれ。・・・階段が見えなかったのは、お前が魔法で消したから、とか、そういうことか？」
「いや、消したわけではない。ただ単に一定の距離を繰り返し歩かせるだけの、つまらない魔法だ。まあ、その魔法に掛った者には、その限定された空間外の物は見えなくなるがな」
「・・・・・おい」
「何だ？」

ふてぶてしいとは、正にこのことだろう。どう怒ってやればいいだろうか。怒りが強すぎて、適切な言葉が出てこない。とりあえず、ありったけの怒りを込めて犯人を睨んでやる。

「そう睨むな。稽古をつけてやるとは言ったが、やはり取っ掛かりのようなものは必要だろう？そのためだったと思っていれば、そんなに悪くはないはずだ」
「そんなわけあるか！」
「ふん。さあ、食べろ。食べたらすぐに稽古をするぞ」

俺の怒りなど意に介さず、食事を始めてしまった。そんな奴相手に、怒鳴っても仕方ない。しぶしぶ俺も食器を手に取る。というか、本当にこいつは勇者である俺を鍛えるというのか。昨日奪われた『シュトラウス』も返してきたし、こんなの魔王らしくない。・・・勝手に想像した魔王像と比べて、だが。

この魔王を見ていると、言いようのない違和感を感じてしまう。本当に、本物の魔王なのだろうか。そんな突拍子もない疑問を抱いてしまうのだ。

「ああ、そうだ」

「ん？」

デザートを食べていた俺に、魔王が声をかける。関係ないが、魔族でも普通に食事というものを摂るんだな。意外というか、なんというか。血肉を啜(すす)るイメージがあるわけではないが、食事なんてしないもんなのだと思っていた。

そんなどうでもいいことを考えていたので、次のセリフに少なからず驚いた。

「俺の名は、ベリアスフロゥだ。これからは名前で呼べ」

「は？」

「代わりと言っては何だが、俺も貴様のことは名前で呼ぼう。名は何だ？」

デザートがスプーンから皿に落ちた。何を言っているんだ、こいつは？勇者と魔王が、倒すべき者と倒されるべき者が、名前で呼び合う、とか・・。ないだろ、普通。それとも失った記憶には、それが普通だとされているんだろうか？

しばしの間、正気を疑ったり、相手の本意を探ったりしてみたが、答えは出なかった。そのうち、名前で呼び合ったから何だというの

か、という考えが浮かびあがってきた。まさか、友達になったりはしないだろうし、どうせ名前の方が呼びやすい、とかそんな理由だろう。

深く考えるのが辛くなってきた。考えてもわからないのだから、しょうがない。ここは、逆らわずにいるべきだろう。返事を待つ魔王へ目を向ける。

「俺は、アリトだ。とりあえず、これからよろしく。えーっと、ベリアス、って呼んでいいかな？」

「構わん。・・・これから、か。さて、よろしくできるか否かは、保障せんぞ」

不敵に笑うベリアスを前に早くも、間違ったかも知れない、と思ってしまったことは、まあ、秘密にしておこう。

その4

魔王との訓練を開始して1時間弱。俺は早くも限界を迎えていた。
というか、訓練ってレベルじゃないぞ、これ。確実に殺しにきている。

「どうした？早くかかってこい」

そう言うベリアスは、ずっと動いていたというのに汗一つ掻いていない。対する俺は、汗でシャツが張り付き、息も上がっている。その上、打ちのめされた体が鈍い痛みを放っていた。満身創痍、と言ってもいい。

「ち、ちょっと、休憩っ・・・！休憩に、しよう・・」

言っている間に、立っていられなくなった。倒れるように地面に座り込む。そうしたらもう、立ち上がれない。そのまま足を投げ出して、寝転がった。

「・・おい」

ベリアスの、険を含んだ声が聞こえたが・・・無視した。返事をしたくなかった。小言が返ってくることが、分かりきっていたからだ。

そもそも、今までずっと剣を振り回してたんだ。少しくらい休んでもいいじゃないか。俺は勇者だが、超人じゃない。魔族のベリアスとは、体の構造が違うのだ。

とか、心の内で言い訳をして、地面に両手を広げる。所謂大の字だ。そんな、立ち上がる意思を少しも見せない俺に呆れたのか、ベ

リアスの気配が遠ざかる。
良かった。これでしばらくは休憩できる。
安心して、目の前に広がる青い空を眺めた。目の覚めるような青空を、白い雲がゆっくりと流れていく。日差しも穏やかだ。自分の現状を忘れたくなるほどに。

ふと、顔を動かす。ベリアスがどこに行ったのか、気になったのだ。首を右に傾けたら、見つけた。少し離れた場所に設置されていた四阿屋にいる。どうやら、完全に俺の説得を諦めているようだ。どこから出したのか、重厚な装丁の本を読んでいる。
また空に視線を戻す。が、すぐに起き上がり、体をほぐした。そして、ベリアスのいる四阿屋へ向かう。しかし、俺が正面に座っても目すら向けなかった。しばらくベリアスの持つ、黒い本の表紙を眺めていたが、勇気を出して声をかけてみた。

「なぁ」
「・・休憩はもういいのか？」

次の言葉を言う前に、質問が返ってきた。顔すら上げずに訊いてきているぐらいだから、俺がまだやる気じゃないことをわかった上で、なのだろう。俺はその質問に答えず、ずっと疑問に思っていたことを訊くことにした。

「お前、本当に魔王、なんだよな？」
「そうだが・・・、何故、今更そんなことを確認している？」

ようやく本から上げられたその瞳に、剣呑な光が宿っているのを認める。静かな怒気に晒されて、無意識に喉が鳴った。手のひらに汗が滲む。
正体を疑ったことが気に入らなかったのか、それとも、読書の邪

魔をしたことを怒っているのか。あるいはその両方か。しかしそんなことは、今は関係ない。気になることを先に片付けたい。そう思い、口を開く。

「だってお前、魔王のくせに俺と・・勇者と馴(な)れ合っているじゃないか。しかも、いつか戦う相手を鍛(きた)えているし・・。お前が魔王だって言うなら、何を考えてそんなことをしているのか。俺は、それが知りたいんだ」

「ふん、くだらん。俺は馴れ合っているつもりなど、毛頭(もうとう)ない。それにな、アリト。俺が貴様を鍛える理由は、既に説明したはずだ。・・・・全ては、この俺が、完璧な勇者となった貴様を倒すためだ・・となな」

「それが、よくわからないんだけど・・。「完璧な勇者」ってことは・・、今の俺は、まだ勇者じゃないって言いたいのか？」

「そうではない。だが、俺が望んでいた勇者とは違う、ということだ」

そんなこと言われても・・、という心境だった。俺が望み通りじゃないなら、ベリアスも俺の想像とは違った魔王だと言わざる負えない。そもそも、自分が思うような出来事や人物など、そう滅多(めった)にあるものじゃない。理想通りにいかないのが現実だ、とも言える。いくら記憶を失った俺であっても、それぐらいはわかる。なので、少し厭味(いやみ)ったらしくコメントを返してやった。

「悪かったなぁ、理想通りの完璧な勇者じゃなくて」

「全くだ。しかし、その点については既に解決策を講じていることだし、許してやろう」

「は？解決策？」

言い方が上から目線なのも気になるが・・・。なんだか嫌な予感

がする。こいつがこんな満足そうな顔をしているときは、大概俺にとって良くない内容だ。二日と一緒にいないが、自信を持って言える。

身構えて、ベリアスの次の言葉を待つ。

「今の勇者が完璧でないなら、これから完璧にすればいい・・ということだ」

ほら、やっぱり。というか、何でそこまで「完璧な勇者」とやらに拘っているんだ、こいつ？さっきから、全然目的が見えてこない。ストレートに言えばいいものを、いちいち面倒くさい言い方しやがって・・。はぐらかされてんのか？でもここまで聞いたんだから、訊くだけ訊いてみるか。

「それで？何でそこまでして俺を完璧にしたいんだ？俺を鍛えて、何がしたいんだよ」

「そんなことは決まっている。完璧な勇者を倒し、この世界を俺のものとするためだ」

うん？よくわからん答えが返ってきたぞ・・？つまり・・・どういうことだ？

しばし頭を悩ませる。

・・・・・・・・・・。

うん、わからない。

「えーっと、ごめん。まだ、よくわからないんだけど・・？」

「頭の悪い奴だな。ふむ・・、戦闘訓練だけでは不十分かもしれんな」

「いや、違う。わからないのは、多分俺のせいじゃないと思うぞ。

それと、さり気に俺を頭悪い認定するな」

俺は記憶喪失なだけで、知能自体は悪くない！・・・はずだ、多分。

「これでわからないのは、頭が悪いからに決まっているだろう？」

「だ、か、ら、普通それじゃわからないだろ！もっとこう・・、あるだろ？！誰にでも伝わる言い方ってもんが！」

「ふん・・。面倒くさい奴だな。・・・まあ、いい。

いいか？よく聞け。まず、お前は、世界とはどういうものだと思う？」

「・・・は？世界？それに、何の関係があるんだよ」

「いいから答えろ」

鋭い視線で、質問を押さえられた。仕方ない。とにかく今は、こいつの質問に答えることにしよう。

でも、世界って・・。漠然とした質問だな。どういうものって、そんなのわかるわけがない。考えたらわかるってものでもないだろうし、思いついたことをそのまま言うことにしよう。

「ん～・・、俺たちが住んでいるところ？」

「頭の悪い回答だな。

・・・・俺は、王が持つに相応（ふさわ）しいものだと思っている」

「王が持つに相応しい・・？ああ、だからお前は、世界を手に入れようとして、宣戦布告した、と」

「そうだ。正確には、主だった国に無条件降伏（こうふく）を勧告（かんこく）したのだ。もっとも、それは即座（そくざ）に拒否されたがな」

「そりゃ、そんなの通るわけないだろ。で？じゃあ攻め込む、とかはしてないんだよな？」

もし、そんなことをしていたら、俺たちはこんなところで悠長（ゆうちょう）に

話なんて出来ていないはずだ。

「ああ、その通りだ。
俺が欲しいのは、今ある豊穣の大地であって、戦争によって焼かれた土地ではない。そこで、人間の間に伝わる伝承を利用することにした」
「伝承？」
「そうだ。それは、聖剣に選ばれし『勇者』が、世界に害悪を撒き散らす『魔王』を倒す・・というものだ」

やっと、俺に関係がありそうな話になったな。どこにでもありそうな伝承ではあるけど・・・。まあ、伝承なんてそんなもんか。

「後は簡単だ。俺たち魔族と人間が戦えば、どちらも相当の損害を負うのは自明の理。ならば、リスクの少ない方法を提供すれば、国を預かる者たちは飛びついてくる」
「ふ～ん。それで、伝承通り、聖剣に選ばれた『勇者』である俺を、『魔王』であるお前にぶつけさせるって構図が出来たわけか。
・・・・ちょっと待て。それじゃ、俺を倒した時点でお前の勝ちは決定じゃないか。何で訓練とかしてんだよ？」

話が見えてきた、と思ったら、結局最初の疑問に戻ってきただけだった。今までの話は、一体何だったんだ。

「だから、『勇者』とは世界の命運を背負っている者であり、この俺と・・いいか？この俺と、世界を巡って戦う相手だ。当然、世界で最も強く、最も知恵ある者であるべきなのだ。そして、そんな完璧な『勇者』を倒したその時こそ、この俺は真の意味で、世界を支配した『魔王』となれるのだ！」

力強く断言(だんげん)された。一瞬、冗談なのかと思ったが、この様子を見るに、本気でそう思っているのだろう。なんだか、どっと疲れが出てきた気がする。いや、一応確認するべきだ。俺の解釈(かいしゃく)が間違っている可能性も、まだ残されているはずだ。

「・・あ～、つまり、その、・・・お前は、真の『魔王』になるために、俺を、完璧になった俺を、倒したい、と？そのために、前段階として、俺を鍛えていると。そういうことか？」

「そうだ。それ以外に理由などあるわけがないだろう？」

「・・・・・はぁ・・・」

思わずため息が出た。なんともコメントしようがない話だな。いや、思うところは多々あるが、言ったところでどうしようもない、というのが正しいか。

目の前の男を見る。自分の思想のために、絶好のチャンスをふいにしたアホは、手にした本を読み耽(ふけ)っていた。世界の覇権(はけんうんぬん)云々など、まるで関係ないかのように。

こんなんでいいのか？本来なら、もっと緊迫(きんぱく)しているものじゃないのか？そう思うが、今の俺がこいつに手も足も出ないのは事実だ。それに、記憶がないからか、いまいちピンとこない話でもある。

記憶を失う前の俺は、このことを知っていたのだろうか？この、目の前のアホな思想を持った魔王と、世界の覇権を争うことを了承(りょうしょう)していたのか。でも、記憶を失ったとはいえ、俺は俺だ。今の俺が、この壮大(そうだい)なアホ話を聞いて、脱力したぐらいだから、多分、元の俺は詳しいことは何も知らなかったのだろう。そう思うと、我がことながら哀(あわ)れに思わなくもない。

「うん？どうかしたのか？」

つらつらと、愚痴(ぐち)めいたことを考えていたら、ベリアスが俺を見ていた。気付かぬうちに、本もしまわれ、今は手ぶらだ。

「え？いや・・」

「そうか。ならば、そろそろ訓練を再開するぞ」

立ち上がったベリアスは、いつの間にか剣を握っていた。こいつが、こんなにやる気な理由がわかってしまったからか、俺の方のやる気は昨夜より無くなっている。だが、断るのは難しそうだ。選択の余地もなく、俺ものろのろと立ち上がる。

と、そこへ、白い塊がすごい速度で飛んできた。ベリアスの前で急停止したそれは、バラシオンだった。

「陛下！大変ですじゃ！！」

「何だ？」

出鼻をくじかれたベリアスは、不機嫌を隠そうともしない。俺としては、訓練と称(しょう)した虐(いじ)めが始まらないなら何でもいいが。

「今、人間どもの偵察(ていさつ)に出ていた者が、大変な情報を持って帰ってきました！」

「さっさと内容を言え」

「は、はい。それが・・我こそは『世界の覇者』であると、名乗る者が現れたそうです・・！」

「！？」

「・・・・そうか」

さすがに予想していなかった内容で、驚いた。一方、ベリアスは、と言うと・・・意外に冷静だった。むしろそっちの方により驚いた俺は、考えるより先にベリアスの顔を覗(のぞ)き込んでしまった。すぐに

後悔した。
　ベリアスは、笑っていた。しかし、俺をからかう時とは違い、その目は全然笑っていなかった。それどころか、冷たさが何倍にもなって、それだけで人を殺せそうだった。

「お、おい・・、大丈夫なのかよ・・・？」
「大丈夫？何がだ？問題など、何処(どこ)にもないだろう？」
「そ、そうか・・」

　だから、顔が、てか目が怖いんですけど・・・。でも、とてもそんなことを言える雰囲気じゃなかった。震える俺とバラシオンを尻目に、ベリアスは城に向かって歩き出した。

「おい、何処に行くんだよ？」
「決まっている。『世界の覇者』などと世迷言(よまいごと)をほざいている輩(やから)を殺しに、だ」

　そこで、実は密かに激怒していたらしい魔王が、こちらを振り返った。その顔は表情がなく、出会ったときから変わらない、冷たい目が俺を映していた。

「アリト、お前も一緒に来い。実地訓練だ」

「嫌だ」とはっきり言える度胸が、俺にはなかった。

シュナイゼル

予定通り、勇者を魔王の元へ送り込んだ。さて、記憶がない勇者様はどうやって、魔王を倒すのか？

出来れば見たい。きっと予想もつかないことを、しでかすに違いない。何と言っても、勇者なのに記憶を失ったり、あっさり騙(だま)されたりするんだから。

「ふふ・・・」

僕を信じきったあの顔。さっきは、魔法を維持するのが大変だった。彼の顔は、未知の出来事に不安を感じている顔だった。それが妙に笑えて、口元が歪(ゆが)むのはどうしても押さえられなかったな。

「さて、と」

情けない勇者様は気になるけど、そんなことより愉しいことが起こりそうな、そんな噂(うわさ)を耳にした。だから勇者様と強引に別れた、とも言えるけど。

どうするかは、まだ考えていない。何が起こってもそれなりに愉しめるんだろうけど、どうせなら極上の享楽(きょうらく)であってほしい。

考えるまでもない。折角(せっかく)面白い玩具(アリト)を見つけたのだ。それを使わない手はないだろう。脳裏(のうり)に情けない彼の顔が浮かぶ。

そうだ。それがいい。彼が魔王と対峙(たいじ)しても生きていたら、の話だけど。

再び杖を構え、『転移』の呪文を唱える。目的地は、もちろん魔

王城なんかじゃない。
やがて、『転移』特有の浮遊感が起こる。
「さあ、とびっきりの宴を僕に見せてよ、勇者様」

その1

～前回までのあらすじ～

目覚めたら、記憶を失っていた俺。そんな俺は、性悪魔法使いシュナイゼルによって、魔王城へと送られてしまう。そこで出会った倒すべき敵、魔王ベリアスフロゥは、アホな思想を持っていた。そのおかげで、俺はベリアスと行動を共にすることになった。さらに、『世界の覇者』を名乗る者が出現する。そして、ベリアスはそいつを殺すと決め、魔王城を出た。・・・俺を連れて。

「というわけで、来てしまった・・・」

商業国と呼ばれる、第一大陸に存在する、商人たちの国。その首都『コミューズ』に俺とベリアスはいた。ベリアスの魔法によって『転移』してきたのだ。その際に、軽くこの国の情報を教えてもらえた。

どうやら、この国の総人口の約7割は、商人とその関係者で構成されているらしい。しかし、国というスタンスをとってはいるが、国王がいるわけではなく、総取締役をトップとした商会代表者たちが政務を務めている、らしい。・・・本当はもっと詳しく説明されたが、よくわからなかった。とにかく、その首都はとても近代的で文化的なところ、だということだった。が、今は巻き込まれたことの方が重要でそれどころではない。

小さな不満が胸に溜まっているのがわかる。気が重い。記憶を失ってからここまでのことを思い返して、さらに重くなった気がする。

「何をぶつぶつ言っている」

「いや、別に・・・、何でもない」

本当は何でもあることばっかりだけどな。でも、何を言っても無駄なことは経験済みだ。人の意見というものを聞かない性格なのだろう。かと言って、無下にされるのは嫌うんだけどな。

さて、そんな魔王を差し置いて、『世界の覇者』を宣言した人は、というと、どうやらこの商業国の総取締役らしい。というか、別に『世界の覇者』だとか名乗ったわけではないようだ。

その総取締役（名前は、オーガナイト・・・・後は忘れた。なんだか長かったのは覚えているが・・）は「勇者といえど、一人の人間。そのたった一人の人間に、世界を任せる、というのはおかしい」という至極まっとうな理由から、自衛のための武力を集めていただけだった。いや、だけというわけではないんだろうけど・・。武力自体は脅威だろうし。まあとにかく、魔王のお株を奪っているわけではなかった。

しかし、ベリアスは、

『何を言っている。そんなものは建前だ。奴の真の目的は、この世界を支配することに決まっている』

と断言し、さらには、

『そして、隙を見てこの俺を殺害つもりなのだ！』

と、ありもしない妄想を展開した。

「殺られる前に殺れ」ということを当たり前の顔をして言われた時、俺は何と言って止めるべきだっただろうか。いや、止めることより逃げることを考えた方が、いくらか建設的だったのではないだろうか。今更考えても仕方ないこととは言え、後悔せずにはいられない。最初に断れなかったのが間違いだったことは明白だったが、あの時ベリアスに逆らっていたら俺は生きていなかったかもしれな

い。
俺は記憶がない。だからこそ、直勘(ちょっかん)は信じるべきだ。そうだ、だから俺が考えるべきは、これから如何(いか)にしてこの面倒事を片付けるか、だ。

広く、清掃の行き届いた表通りを、我が物顔で歩くベリアス。その後ろ姿を見る。堂々としていて、正直とても格好良い。道を歩く人々が振り返る。道端で女の子たちが、こちらを見ながら、興奮した様子でひそひそと話をしている。

「それにしても、人間の街は随分と騒がしいな」

前を行くベリアスが迷惑そうに言った。

「そりゃそうだろ」

何と言っても、ベリアスは、見目だけは麗(うるわ)しいからな。それに、どこか気品というのか、華やかさがある。着ているのは地味な黒い服だというのに・・・。見た目も雰囲気も、普通じゃない。どう見ても貴族・・しかも上流階級が、供(とも)一人（多分俺はそう見えているだろう）だけを連れて歩いているのだ。見るなという方が無理だろう。

「俺の顔を知っているとは・・・なかなか侮(あなど)れんな」
「ん？何言ってんだ？」
「？こいつらは、俺が魔王だから警戒しているのだろう？」

振り返ったベリアスが怪訝(けげん)そうな顔をする。だが、多分俺も似たような顔をしているのだろう。俺は、ベリアスの言っていることがよくわからなかった。

「えっと・・？」
「・・・どうやら俺とお前で、認識に差があるようだな」
「ああ・・。うん、つまり、お前は、自分が魔王だから注目されている、と思っている・・・のか？」
「そうだ」

確認した俺に頷き返す。

「いやいや、そんなわけないだろ。皆は、お前を見て騒(さわ)いでるだけだ」
「だから、俺が魔王だと・・」
「ああ、違う。えっと・・、・・お前は、俺たち人間から見て、格好良いんだよ。わかるだろ？」
「いや？よくわからん」

本気でわかっていない顔をされた。これ以外に何て言えばいいんだ？格好良いで伝わらないなんて・・。

「・・・・よし、じゃあこれでどうだ。
まず、お前は見た目が良いんだ。この場合の「良い」は、「好ましい」ってことだ。で、人間の中には、「好ましい」見た目の奴が少なくて、・・・そう、珍しいんだ。だから皆お前を見るんだよ」
「・・・ふむ、ではちょっと殺してくるか」
「なんでそうなるんだよ！？」

意味がわからない。魔族は、注目する人間は殺すって常識でもあるのか？！
今にも魔法を発動させそうなベリアスを路地に引っ張りこむ。とにかく人気のない所に連れて行こう。
路地裏をいくつか抜け、人手の少ない裏通りに出た。ここならし

ばらくは大丈夫だろう。振り返ると、渋面を作ったベリアスと目が合った。

「おい、いきなり何をする。邪魔をするな」
「あのなぁ・・。お前いきなり殺すとか、何考えてるんだよ？」
「この俺を珍獣扱いした屑人間に、格の違いを教えてやろうとしただけだ」
「はあ？」

何言ってんだこいつ。また認識の差が出来てるようだな。珍獣扱いって、どこでどうなったらそんな話に・・。

「あ、そういうことか・・。違う、違うぞそれは」
「？何がだ」
「珍しいって、そういう意味じゃなくてだな、あんまり居ないから新鮮っていうか・・。とにかく、悪い意味じゃないってことだ！」
「む・・、納得がいかん」

まだ渋い顔をしているベリアスに気付かれないよう、そっと溜息を吐く。ちょっと前から思っていたが、こいつと一緒だといちいち疲れる。何でこう、一般常識というものがわかってないのだろうか。記憶のない俺の方が常識人って、おかしいだろう。しかし、ここで愚痴を垂れてもしょうがない。意識を切り替えよう。深く考えても良いことは一つもないのだから。
何処を見るともなしに彷徨わせていた視線を、ベリアスに戻す。

「で、どうすんだよ？これから」
「ん、ああ。そんなことは決まっている。総取締役とやらを殺す」
「・・・忘れてなかったんだな」
「当然だ。目的を忘れるなど、愚者のすること。・・さあ、俺を案

内しろ」
「・・うん？何だって？案内・・・？」
　案内って、誰が、誰を？まさか俺ではないだろうな。くどいようだが、俺は記憶喪失だ。そんな記憶に頼った行為、出来るわけがない。でも、こいつの言うことだからな・・。どんな無茶でも言いそうだ。

「・・・一応訊くけど、俺、じゃないよな？」
「お前だ」
「・・・・・・・・。忘れてるみたいだから、もう一度言うぞ？俺は記憶がないんだ」
「だが、お前以外はお前のことを覚えている。そうだろう？お前は勇者だ。その名の権力を、今使わずに何処で使うんだ？」
　勇者は世界のために命がけで戦う。だから、各国の協力を得ることも出来る。つまり、然るべき場所に申請すれば、案内役などいくらでも使えるし、多分、総取締役にも会える。・・・と、いうことか？

「まさかとは思うが・・、もしかしてそのために俺を連れて来たのか？」
「当たり前だ。そうでなければ、何のために貴様と二人きりで来たと思っているのだ」
　実地訓練というのは、こういうことか？そして、こいつが部下を連れて来なかった理由もなんとなく察しがついた。
　あまり大勢で動いては警戒されるから、というのもあるだろうが、俺の仲間として行動するには少人数の方が都合が良かったから、だろう。何処までも自分中心で、俺がどう考えるか、など全く考慮に

入れていないところがベリアスらしい。

最近気づいたんだが、どうも俺は流されやすい性格をしているようだ。これが記憶を失ったからか、元からなのかはわからないが、そのせいで面倒事に巻き込まれまくっている気がする。そして、それを周りに良いように利用されているような気もする。・・・気がするだけならいいけど、そんなことはないだろう。むしろ断定口調でもいいぐらいだ。

考えただけでも溜息が出る。

「ようやく理解できたようだな。では、行くぞ」

「・・・はぁ・・」

しかも、「魔王の手引をする勇者」って・・・本当に勇者と言えるんだろうか？

役所を目指して意気揚々（いきようよう）と行く魔王の後ろを、肩を落として続く勇者。絶対勇者じゃない。こんなの勇者とは程遠いだろうな・・・。

今日何度目かもわからない溜息が零れた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アリトとベリアスが役所を目指していた頃、国会議事堂の奥、品の良い家具が置かれた一室に、一人の少女がいた。

白とピンクが基調のドレスを着て、優雅（ゆうが）な手つきで紅茶を飲んで

いる。その正面には、紺のスーツに身を固めた男たちを従えている、身なりのいい紳士が座っている。

「いいかい、エリィ。父様は、今から重要な会議に出なくてはいけないんだ。折角可愛いエリィが見学に来てくれたのに、すまないね。会議が終わったら少し時間が空くから、その時は一緒に国会議事堂を探検しよう。それまでは、ここで大人しく父様を待っていてくれるかな？」

「・・・はい、わかりました。お父様、お仕事頑張ってくださいね」

にっこり笑うエリィ、エリトリカ、に紳士は笑顔を返す。

「良い子だ。じゃあ、行ってくるよ」

「はい、いってらっしゃいませ」

席を立ち、廊下へ出ていく紳士たちに手を振る。ぱたりとドアが閉まって、たっぷり３０秒ほどその姿勢のまま立ちつくす。もう戻ってこないだろうと確信できるまで待った少女は、大きく溜息を吐いた。

「全く、父様はいつもいつも・・・。まだ私のこと小さい子供みたいに扱って。私はもう１６なのよ。もう少し大人として扱ってほしいわ。ねぇ、アニー？」

「そうでございますね」

エリトリカは部屋の隅で控えていた侍女（じじょ）に声をかけて、乱暴に椅子に座った。

「ですが、お嬢様？淑女（しゅくじょ）たるもの、そのような座り方をなさってはなりませんよ」

「・・・・わかってるわ」

明らかに不満顔ながら、ドレスの皺(しわ)を伸ばし、座り直す。そんなエリトリカの前に、アニーと呼ばれた侍女が新しい紅茶のカップを置いた。

「旦那様がお戻りになるまで、本でもお読みになられますか？」

「そうね。そうするわ。どうせ長くなるでしょうから」

「では、どれになさいますか？」

「決まっているじゃない！勇者と魔王のお話よ！・・・ああ、この世界の何処かで、今まさに勇者と魔王が戦っているかと思うと、ドキドキするわね！」

先ほどの不満顔が消え、満面の笑顔になる。胸の前で指を組んで、目をキラキラさせる。そんなエリトリカに、本が差しだされる。

「お嬢様は、本当にこの伝承がお好きですね。やはり、この世を救う勇者は格好良いですか？」

「そ、そうね・・。あ、ありがとう。本に集中したいから、少し席をはずしてくれる？お茶はいいから」

「そうですか？では、少し外を歩いてきますね。遠くには行きませんので、何かありましたらお呼びください」

何処か挙動不審(きょどうふしん)なエリトリカに首を傾げつつも、一礼して部屋を出ていくアニー。残されたエリトリカは、天井に向かって溜息を吹きかけた。

「父様もどうかと思うけど、アニーもちょっと過保護だわ。それに・・・」

手にした本を撫でる。それには、エリトリカの大好きな、勇者と魔王の伝承が書かれているのだ。

「私は・・勇者より、魔王の方が好きだわ」

小さく呟いて、本を開く。開き癖のついたそのページは、古いタッチの絵が描かれていた。両手を広げ魔法を放とうとする、角の生えた男と聖剣を構え、斬りかかろうとする鎧を着た青年。それは史実から起こされた、勇者と魔王の姿だった。

「これは、魔王が悪役だけど、きっと本当の魔王は優しい人よ。だって、魔王は戦争を起こしたりしなかったもの」

絵の魔王に触れる。まるでそこに、本物が居るかのように優しい手つきだった。

本当の魔王は、優しい。そう信じる少女は、何度も読んだであろう本を抱きしめて、窓の外へ目を向けた。

「会ってみたいな・・・」

窓の外は、雲一つない晴天だった。

その2

役所はすぐに見つかった。しかしそこからが、大変だった。俺が勇者だと証明できるものは、腰に吊った聖剣『シュトラウス』だけ。まずこの時点で、疑われた。『シュトラウス』を抜いて見せても、反応が薄かったのだ。どうやら、そういった偽物を何度も見せられたらしい。

確かにそうだよな。勇者というだけで、いろいろと免除されることもあるのだ。特典目当てで身分詐称をする奴だって、当然出てくるだろう。

何を隠そう、記憶を失ってすぐの俺も、抜くまでこれをレプリカだと思っていたこともあるのだから、一目で見抜くのは難しいのだろう。

で、どうしたかというと・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「馬鹿か、貴様ら。聖剣など、見ればわかるだろう？それとも、貴様らはそんなことも見抜けない節穴しか持っていないのか？」

ベリアスが小馬鹿にした態度で言い放った。

さすがに、この言い方は拙いだろう。相手を怒らせるだけだ。急いで隣のベリアスを突き、小声で注意しようとする。

「お、おい、もうちょっと言い方を・・」

「・・・君たち、我々は忙しいんだ。あまり邪魔をするようなら、警備隊を呼ぶが？」

額に青筋を浮かべた職員が、俺の声を打ち消した。次いで、追い払うように手を振る。こんな対応をしたら、確実にベリアスは怒るだろう。そろり、と隣を見る。

怖い。何もしていないし、口を開く気配もないのに、一瞬後には殺されそうな雰囲気だ。殺気・・というか、もうこれは暴力に近い。

隣に居る俺でさえ、そうなのだ。正面でそれを受け止めている、職員は大丈夫なのだろうか・・・？前へ視線を戻す。職員は、先ほどと同じ場所に立っていた。大丈夫なのかと思ったが、よく見たら、立ったまま気絶していた。

「ふん、軟弱な奴だ」

「・・い、行くぞ！」

偉そうに腕を組んで冷笑を浮かべるベリアス。その腕を掴んで、廊下へ逃げる。人のいない奥へ足を向け、手近な部屋に飛び込む。幸い、その部屋には誰もいなかった。どうやら、備品置場のようだ。

「今度は何だ、一体・・・。鼻息が荒いな。どうした？」

「お前、自分のやったことわかってる・・・いや、何でもない」

絶対わかってないに決まっている。それを証明するように、目の前の男は、既に俺から部屋に置かれた備品に興味を移していた。

自由すぎる。やりたい放題じゃないか。これでは、総取締役と会うどころか案内役すら確保できないぞ。

今更と言えば今更だが、危機感が湧いてきた。このまま、こいつのペースで行っては駄目だ。主導権を握らなくては・・！でなければ、俺は気の遣いすぎで死にそうだ。

「な、なあ、作戦を立てよう」

「作戦？」
「そうだ。だってこのままじゃ、総取締役に会うことなんて夢のまた夢だ。だから、作戦を立てるんだ。俺たちの目的を実現するには、必要だろ？」
「・・・・ふむ、それもそうだな。だが、具体的にはどうするのだ？」

よし！乗ってきた！これで、こいつを外にでも追いやって邪魔できないようにする。その間に、俺が職員の方々を説得すれば良い。完璧だ。説得自体は問題じゃない。懇切丁寧（こんせつていねい）に説明すれば、いずれわかってもらえるはずだ。でなくても、調べればわかる。ベリアスの言葉ではないが、俺自身が記憶を持っていなくても、俺が今まで関わってきた人たちは、俺のことを覚えているのだから。

「そうだな。じゃあまずは・・」
「この建物を制圧しよう」
「・・・えっと、そういうのは、ちょっと・・。もっと平和的解決方法がある・・」
「では、人質でも取るか」
「それもちょっと・・。だから、俺が考えた作戦は・・」
「そうだな。人質は生かしておかなくてはならなくて、面倒だ。全員殺そう」
「それ意味ないから！！お前、目的忘れてるだろ！あと、俺の発言をいちいち遮（さえぎ）るなよっ！」
「うるさいぞ。そんな大声を出さなくても聞こえている」

駄目だこいつ。話が通じない、とかじゃない。最初から、話を聞く気などないに違いない。こんな奴に外へ出ていてくれ、とか、俺に任せておけ、とか言っても聞くわけがない。どうしたらいいんだ・・・。

「・・・そんなに、平和的解決がしたいのか？」
「！ああ、もちろんだ」
意外なことに、ベリアスはちゃんと話を聞いていたようだ。驚きだ。
「今失礼なことを考えていないか？」
「い、いや、そんなことはないぞっ」
「そうか・・・。まあいい。続きを話すぞ」
「ああ。まさか・・・平和的解決法を考えついたのか？」
「そうだ。・・・・何故そんなに驚く」
そりゃ驚きもする。口を開けば暴力的なことしか言ってこなかった魔王が、よもや平和的解決法などを考えついたとは・・・。成長したな、ベリアス。
「・・・おい、その顔をどうにかしろ。生温かくて気持ち悪い」
ベリアスこそ失礼じゃないか？しかも心底嫌そうに眉を寄せているし。・・・そんなに気持ち悪かったのだろうか？俺としては、慈愛の眼差しで見つめていたつもりだったのだが。
おっと、そんなことより、ベリアスの考えた作戦だ。一体どんな突拍子もないことを、思いついたのか・・・。
「よし、では先ほどの部屋へ戻るぞ」
「え！？」
止める間もなく行ってしまう。慌てて後を追いかける。ベリアスは、俺を気にする様子もなく、さっさと、先ほどの部屋へ入って行

く。そういえば、ベリアスが気絶させた職員は、どうなっただろうか？気になった俺も急いで中へ入る。
室内は、ついさっきより人で溢(あふ)れかえっていた。どうやら、気絶していた職員は無事に保護されたらしい。ここにはいないから、医務室かどこかへ連れて行かれたのだろう。他の職員たちは、何が起こったのか確認したり、滞(とどこお)った業務に追われたり、騒然(そうぜん)となっていた。

「アリト、聖剣は勇者の証だ。では、何故そうなのか、考えたことはあるか？」

周りの混乱を生みだした張本人は、その騒ぎになど目もくれず、俺に問いかけた。
聖剣が勇者の証であるのは、何故か？そんなことは、考えたこともなかった。というよりも、考えること自体おかしいのではないだろうか。だって、そこを疑ってしまったら、俺は勇者という立場すら失うことになってしまうではないか。

「・・・そんなこと、今は関係ないだろ」
「関係なら、ある。・・『勇者』とは、本来、勇気ある者のことだ。そして、誰もが恐れる『魔王』に、勇気を持って立ち向かい、勝利した者のことをそう呼ぶのだ」
「それが・・・、どうしたっていうんだよ」
「つまり、『勇者』という称号は、事後に与えられるものなのだ。だが、お前は『魔王(おれ)』を倒していない」
「それは、そうだけど・・・。でも、それは仕方ないだろ？そもそも、お前や、国の偉い人たちが勝手に、勇者が魔王を倒すって伝承に準(なぞら)えたりするからいけないんだろ」

しかし、考えてみれば、ベリアスの言う通りだ。『勇者』はあく

まで、『魔王』を倒した者に与えられるべきものだ。まだ倒してもいないのに、名乗るのはおかしい。
だが一方で、それは言葉の意味であって、実際には、『魔王』と戦うよう宿命づけられた者に対して使っている、と言うこともできる。使い道が二通りある、というだけだ。そのいう点では間違っていない。

「そうだ。俺たちの考え通りに事を運ぶには、『勇者』がいる。しかし、『勇者』とは先ほど言った通り、後々（のちのち）生まれるものだ。だから、『勇者』とそうでない者を分ける必要があった」
「『勇者』と、そうでない者？」
「一般人、とでも言えばいいのか。ただの冒険者では、駄目だということだ。そこで、その見極めとして、特別な道具を創ることにした」
「それって・・・、まさか・・・」

腰に手をやる。そこには、いつもと同じように聖剣『シュトラウス』がある。柄に軽く触れると、乱れた心を落ち着かせる温かさが伝わってくる。

「聖剣は『勇者』の証、というのは、そういうことだ」
「・・・・・・」
「さて、『勇者』を証明する道具がただの道具では、意味がない。『それ』は誰が見ても、「聖剣である」と認められなくてはならないし、またそうあるべきものだ。では、万人に認められるにはどうしたらいいのか？」

新たな命題。だが、俺には答えがわからなかった。『勇者』とそうでない者を分けるための、道具。その響きが、思いのほか頭に残っている。ショックだった。理由はわからないけれど、何だか嫌だ

った。だから、そのことばかり脳裏(のうり)をよぎって、余計にわからない。
「わからないか？」
「・・・ああ、わからない。焦らしてないでさっさと、教えてくれよ」
「それはな・・」
「ねぇ、君たち、ここは、今ちょっといろいろあって、関係者以外立ち入り禁止になっているんだ。用事があるなら、受付の方に行ってくれるかな？」

答えを聞く前に、俺たちに気付いた職員が声をかけてくる。若くて、人の良さそうな顔をしている男性だった。眉が困ったように垂れ下がっているのが印象的だ。彼が俺たちに声をかけたことで、室内の他の職員たちも俺たちに気付いた。
随分(ずいぶん)と長話(ながばなし)をしていた俺たちに気付かないほど、混乱していたらしい。そのうち一人が、驚きの声をあげた。

「あっ！貴方たち、あの時来てた、勇者を騙(かた)っていた人ね」
「どういうことだ？」

彼女は、俺たちが例の職員と話していたときにそばにいたらしい。上司と思わしき人にその時のことを、報告する。話が進むにつれ、段々と上司の顔が強張っていく。

「・・・つまり、ナツカ君が倒れた時に近くに居た可能性があるんだな？」
「は、はい。私はその時、書類を整理するため部屋を出ていたので、犯行現場を見ていたわけではないのですが・・」
「君たち、ちょっと、話を聞かせてもらっていいかな？」

一応疑問形だったが、拒否権はないと思っていいだろう。ナツカ、というのが、ベリアスが気絶させた職員の名前なのか。さて、どうなることやら・・。街の警備隊とかに突き出されるのだけは、勘弁願いたいが。俺はともかく、ベリアスは拙い。なんてったって、魔王だからな。

「おい、そこの豚。こいつの剣を持ってみろ」

「空気を読んで！お願いだからっ！」

何でこいつは、拙い時にあえて拙い言い方をするかな！？さすがに、フォローできないぞ、これは。

豚、じゃなかった、この中で一番偉いのだろうさっきの上司が、言葉を失っている。誰もが唖然としている。そんな中、ベリアスだけはいつも通りだった。

「貴様らは、聖剣を見極めることも出来ない能無なのだろう？ならば、貴様ら豚の如き無能な連中でもわかるよう、この俺が指導してやる。さあ、この剣を持て」

ベリアスって、他人を虚仮にするときだけ、やけに活き活きとするよな。その証拠に、今も愉しそうに笑っている。そして、目線で俺に「剣を抜け」と言ってくる。今逆らうと、今度は俺が標的にされそうな気がする。他人の目があるところで扱き下ろされるのは、嫌だ。それに、多分、ベリアスにも考えがある・・・はずだ。ここは、黙って従おう。

『シュトラウス』の柄を握り、鞘から抜き放つ。淡い光が、場を包む。そばに居た、最初に声をかけてきた青年職員が、感嘆の声を漏らした。しかし、ベリアスはそんな彼を見向きもしないで、上司だけを見据えている。あの冷たい視線にさらされるのは、辛い。経

験があるからわかる。案の定、上司の額から冷や汗が一筋垂(ひとすじ)れた。

「豚は知らないだろうが、聖剣は『勇者』にしか持てない。だからこそ、聖剣が『勇者』である証明となるのだ。お前は『勇者』ではない。そのお前が、聖剣を持ったらどうなるか・・。『勇者』とそうでない者の差を、見せてやろう」

「さあ、持て」と、ベリアスが促(うなが)す。その場の全員が呑(の)まれていた。もちろん俺も。だから、上司が震える手を差し出してきた時、素直に『シュトラウス』を渡してしまった。そして、すぐに後悔(こうかい)した。

その3

眉の垂れ下がった青年、セイオンの案内で俺たちは、国会議事堂の広い廊下を進んでいた。

ようやく、勇者と認められたのは良かった。目的であった、総取締役との会合も設定してもらえた。何もかも上手くいった。でも・・・納得いかない。

「何で、あんな暴力的な方法で、何とかなっちゃったんだろう・・・」

「いつまで終わったことを蒸し返している。鬱陶しい」

全ての元凶である魔王は、相変わらず自分のせいであることを理解していない。むしろもう一生理解しないんじゃないか、と思ってしまう。しかも今回は見方を変えれば、ベリアスのおかげであったと言えなくもないのだ。そのため強く言えない、というのもある。

「でもなぁ・・・」

確かにあの時、上司の人が聖剣を持ったことから、俺は勇者と認められた。正確には、持って、その後に起こった騒動によって、だが。でも、もっと良い解決方法が絶対にあったはずなのだ。今更な話ではあるが、やっぱり、後悔してしまう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『シュトラウス』が俺の手から離れた。輝く剣を持った上司は、

最初、呆然としていたが、やがて我に返った。

「何も起こらないし、何もおかしなところはないじゃないか。・・・全く、変なことに付き合わされっ・・！！」

言っている途中で倒れた。恰も、電撃に打たれたようだった。倒れた後も、断続的に痙攣を繰り返している。

「ど、どうしたんですか？！大丈夫ですか？！！」

一気に場が騒然となった。慌ててしゃがみ込んで、彼の肩を揺するが、反応がない。不幸な彼は、白目を剥いて気絶していたのだ。

目覚める気配のない彼の手には、まだ『シュトラウス』が握られている。無意識に手を伸ばすが、先に別の職員に取られてしまった。

「と、とにかく仰向けにして、楽な姿勢にするんだ！後、医者！誰か、医務室へっ・・！？」

その職員も、上司と同じように痙攣して、倒れた。彼が倒れたことで、さらに混乱が強くなる。

ベリアスを見上げる。魔王である彼なら、治癒魔法も簡単に使えるはずだ。しかし、魔王はこの混乱を愉しんでいるようだ。それを見て、俺は逆に冷静になった。ベリアスは、こうなることをわかっていた。ということは・・・原因は『シュトラウス』しか有り得ない。『シュトラウス』を取り戻さなければ、と目で探す。その時には、既に別の職員が、前の2人と同じ末路を辿っていた。

更なる被害を防ぐために、慌てて『シュトラウス』を手に取る。しかし予想に反して、彼らは動かなかった。全員が、俺を見ている。

「わかっただろう？持ち主を選ぶ剣。そんなものは聖剣以外に有り

得ない」

それはつまり、そんな剣を持てる俺が勇者である証拠だ。そう、ベリアスは言いたいのだろう。言葉にしなくても、この場に居る全員がわかった。でも、勇者を尊敬するとか、そんなプラスな感情で俺を見てくれている人はいない。したり顔で笑うベリアスよりも、どう考えても俺の方が、魔王を見る目で見られている。

泣きたくなってきた。でなくても、申し訳ない気持ちがしているのだ。抜き身だった『シュトラウス』をしまうことで、職員の方々から目を逸らす。

早くこの場を抜けたい。緊張感が、緩(ゆる)むことなく俺を覆(おお)っている。

「ふん、ようやく本来の目的が果たせるな」

場に満ちた空気を無視して、一人、話を進める。口を挟める者は、誰もいなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

何度思い返しても、後悔しか湧いてこないなんて・・・。いっそ、なかったことにしたいぐらだ。だが、俺たちを案内するセイオンは、気弱そうな顔に明らかな畏怖(いふ)の念を浮かべている。それが、俺に「忘れる」という選択肢を奪わせる。

「おい、アリト」

「何だよ・・？」

落ち込む俺を慰(なぐさ)めることもしない奴が、小声で話しかけてきた。

「今から言うことを、よく頭に入れておけ。いいか？まず、俺は部屋に入ったら、奴の死角に入る。お前は、俺が動きやすいように奴らの気を逸らせ。機会が来たら、俺が奴を殺す。・・・ああ、退路の確保は自分でしておけよ」

これを本気で言っているところが怖い。ちょっとそこまで、みたいなノリで人を殺そうとしている。止めなければいけないけど、どうすればいいだろうか。とにかく、時間が欲しい。どうにかして時間を稼いで、その間に考えるか・・・。

「あ、あの・・ここです」

時間を稼ぐ前に、着いてしまった。隣で、ベリアスが厭な感じの笑みを浮かべている。もう止められない。

それでも、諦めきれずにドアノブを見つめる。これを開けないで済む方法は・・・考えつかない。すると、セイオンがそのドアノブを掴んで開けてしまった。

「あ・・・」

「あの、ど、どうぞ・・」

恐縮した様子で、扉を支えるセイオン。中に入るしかない状況に、肩を落とす。もう駄目だ。こうなったら、死を覚悟して捨て身で止めるしかない。どう転んでも良いことにはならない未来に胸を痛めつつ、中に入った。後ろで、扉が閉まった気配がした。

振り返っても仕方ないので、部屋の中に目を向ける。落ち着いた様式で、きっと高いに違いないセンスの良い家具が置かれている中、白いカーテンが眩しい窓際に、一人の男が立っている。

「こんにちは。貴方が勇者様、ですか？」
「あ、はい」
茶色の髪に翠（みどり）の瞳。身に付けたスーツが良く似合う、ダンディ、というのか？そんな雰囲気の男だった。ただ立っているだけなのに、なんだか存在感がある。
ど、どうすればいいんだろうか？挨拶なんて考えていなかった。ああ、どうしよう・・！今更緊張してきた！
「どうぞ、座ってください」
「は？！は、はい！」
言われるがまま、一番近い椅子に座る。男が、低いテーブルを挟んで向かい側に座る。そこで気がついた。彼の後ろには、紺色のスーツを着た男たちが立っていた。よく見ると、部屋の出入り口にも居る。全員手を後ろに組み、まるで俺たちを監視しているかのようにじっと立っている。
「彼らは私のＳＰです。基本的には何もしないので、気にしないでください」
俺が見ていたからか、男が微笑んで教えてくれた。しかし・・・「えすぴー」って何だ？聞いたことない。訊ける雰囲気でもない。後で、調べておこう。
「さて、まずは自己紹介しておきましょう。私は、この商業国の総取締役をしている、オーガナイト・フィゼル・アスフィートと申します。オーガナイトと呼んでください」
「はあ・・。あ、俺は・・・」
「貴方の自己紹介は不要ですよ。実際に顔を合わせたのは初めてで

すが、話には聞いていますから。・・・ああ、何か飲み物を御出ししなくては。紅茶でよろしいですか？」
「はぁ、はい。いいです」

何を話したらいいのか、わからない。彼、オーガナイトはこういった接待は慣れているようだが、俺はこんな扱い初めてで、戸惑ってしまう。今までは・・・玩具扱いか、蔑ろにされるか、といったところだったのに。
記憶を失ってからのあれやこれやが、頭に蘇る。その間に、紅茶が運ばれてきた。良い匂いが湯気とともに立ち昇る。

「・・それで、私にどんな用事ですか？聞いた話では、何か困ったことがあったということですが？」
「あ、えっと・・・」

そうだった。会うに当たって、何か口実が必要だ、ということで「相談したいことがある」って名目を作ったんだっけ。・・・ベリアスが。一応設定は、魔王と戦うための装備を整える、というのだったな。

「いきなりで悪いのですが、魔王と戦うために装備を整えたいと思いまして・・」
「ふむ・・確かに、彼の魔王を相手にするのですから、当然の話ですが・・。何故私に？武器は聖剣がありますし、防具も、その聖剣が創られた聖国家の方が、我が国よりも良い物が揃っていると思いますが」
「えっ？そ、そうなんですか？」
「ええ。・・御存じなかったようですね。でしたら、こちらで護衛を付けますので、聖国家まで御送り致しましょうか？」

紳士的且（か）つ、魅力的な話だった。忘れていたが、俺は元々記憶を取り戻すために聖国家へ行く予定だったのだ。頷きたい誘惑に駆られたが、そうはならなかった。俺が口を開く前に、ベリアスが仕掛けたのだ。

目を潰す程眩しい閃光が、瞬いた。遅れて響いた轟音で、我に返る。ちょうどオーガナイトが座っていた所が、砂煙に埋まっている。

全く反応できなかった。捨て身で止めるとか・・・無理というか無謀だったことを知った。

「ちっ！外したか！」

言うや否や、何処からか出した大剣を握ったベリアスが、俺を飛び越えてテーブルに着地する。そして、未だ砂煙に覆われている正面に向かって、大剣を振り下ろした。

「っ？！！」

そのベリアスの一撃が、弾き返された。それも凄い威力で。ベリアスは、弾き飛ばされて、再び俺の上を飛び越えた。

驚き過ぎて腰を浮かしたまま固まっていた俺の目の前から、砂煙が収まっていく。やがて、先ほどと変わらない姿で座る、オーガナイトが現れた。

「これは、どういうことですか？」

「・・・え・・」

「私が開発した対魔族用のシールドが発動した。と、いうことは、彼は魔族だということです。そして、彼は貴方と共に来ました。これは、一体どういうことを指示しているのか・・・」

「えっと、あの、」

「ああ、今は、説明は結構です。そんなことより、彼を拘束しなく

ては」

立ち上がったオーガナイトの、視線の先を見る。ベリアスが、不機嫌そうな顔で立っていた。構えてはいないが、大剣はまだ握ったままだ。そしてその目は、オーガナイトを捉えている。漲る殺気が見えるようだ。しかし、その対象になっているオーガナイトは、薄く笑っている。

「ちょうど良かった。対魔族用とは言っても、実験できる素材がなかったので伸び悩んでいたのだが・・、良い材料が手に入りそうだ。・・・彼を連れてきてもらえたのですから、貴方には最上級の装備を御渡ししなくてはね」

・・・何を言っているのだ、こいつは？今、何と言ったんだ？実験？何をするつもりだ・・。

「ふっ・・、そうだな。ちょうど良い」

混乱する俺を置いて、ベリアスが口を開いた。不機嫌な顔から、不敵な笑みに変わっている。だが、これは怒っているに違いない。冷たい炎の色が、オーガナイトを睨んでいる。

「すぐに、実験など出来ないようにしてやろう」

「さあ？そんなこと出来るか、見てあげましょう」

身構えるベリアスに、余裕な態度を崩さないオーガナイト。一触即発の空気に、肌がピリピリする。しかし、何故オーガナイトはこんなに余裕なのだろうか？ベリアスが魔王だと知らないから？それとも・・・・何か奥の手があるのか？

嫌な予感がする。今までにないほどの規模の予感に、体が震える。

このまま、ベリアスを戦わせてはいけない気がする・・・！
気が付いたら、行動していた。

「！？何をする！！」

確証もないし、考えもなかった。でも、この嫌な感じは、駄目だ。そんな、本能レベルの直勘に従ってベリアスの腕を掴む。抵抗するベリアスを強引に引きずって、部屋を出ようとする。

「これはこれは。・・・それは勇者の取って良い行動では、ありませんよ」

何かが、顔の横を通り過ぎた。頬に鋭い痛みが走る。空いていた手で触ると、血がついた。どういうものかはわからないが、攻撃されたらしい。

「おい！放せ！」

怒りの滲む声でベリアスが、腕を引く。でも、それ以上の力で引っ張り返す。とにかく、全て後回しだ。ここから逃げることだけ考える。

どんどん強くなる抵抗を抑えつけながら、部屋の扉に突進する。再び何かが飛んでくるが、無視する。標準が甘いのか『勇者』を殺すわけにはいかないからか、体を掠るだけで済んでいる。その隙に、扉を蹴り開けて飛び出す。

いつの間に出たのか、えすぴーが俺たちを捉えようと手を伸ばすが、それはベリアスの剣で遠ざけられた。しかし、どんどんえすぴーの数は増えていく。今はいないオーガナイトも、すぐに部屋から出てくるだろう。

「ベリアス、とにかく今は逃げよう！」
「・・・ちっ！この貸しはいつか返してもらうからな！」

まだ戦う姿勢は解いていないが、とりあえず逃げることには同意してくれたみたいだ。
俺も聖剣を抜いて牽制しながら、えすぴーが少ない方を探る。

「こっちだ！」

ベリアスがいち早く動いた。群がる紺色を一掃しながら疾駆する。遅れては敵わないので、俺も走る。手加減はしているのか、ベリアスは大剣の腹で男たちを昏倒させていた。俺も習って、脇から飛び出した男を『シュトラウス』で殴る。次いで、進行方向に構えるえすぴーの足を掬う。

そうやって走っている内に、ここが何処なのかわからなくなってきた。しかし、どうやら奥に向かっているようだ。目の前に出てくるえすぴーはもういない。後ろからは追手の足音が聞こえる。まだまだ追ってくるつもりらしい。
先を走るベリアスは、まるで道を知っているかのように迷いなく進んでいる。少しでも遅れたら置いていく、というような速度で走り続ける。やがて、後ろの足音が聞こえなくなってきた。足の速さは、俺たちの方が断然上だったようだ。
それでもまだ、ベリアスは走る。だから、俺も走らざる負えない。息が上がり、心臓が壊れそうなぐらい鳴っている。と、唐突にベリアスが止まった。

「うわっ！！？」

俺は急には止まれない。ベリアスを追い越してしまう。そして、

壁にぶつかった。

「・・・痛っ～・・・、行き、止まりならっ・・・、そう、言え、よ・・・」

息が上がっている上に、ぶつかった痛みで、床にへたり込んでしまった。それでも、抗議(こうぎ)だけはしておいた。例え、それが全く聞き入れられなくても、言わないなんて選択はしない。

「ふむ、撒(ま)いたようだな」

後ろを確認したベリアスは、俺を見下ろし、すぐそばの扉に手をかけた。

「俺はともかく、お前はもう限界だな。ここで休んでいくぞ」

そう思っているなら、手を貸してほしいんだが。そんなことをするわけもなく、ベリアスは扉を開けた。が、部屋の中へ入っていかなかった。

「どうしたんだ？」

何とか息を整えた俺が、体を起して訊くが答えはない。しょうがないから、疲れた体に鞭(むち)打って立ち上がり、ベリアスの隣にいく。渋面(じゅうめん)を作るベリアスは、部屋の中を見ている。

俺も中を覗いてみた。

「あ、貴方たち、誰？！」

俺も顔を顰(しか)めてしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0223w/

未来の伝説

2012年1月6日16時51分発行